山梨市文化財調査報告書　第４集

東後屋敷遺跡

平成７年３月

山梨市遺跡調査会
山梨市教育委員会
朝日商事有限会社

序

山梨市は、「可美里（郷）」という形で古くから文献に登場しています。このことからも、市内には古代甲斐国の様子を知る手がかりとして、多くの遺跡が地下に埋蔵されていることが予想されます。今回の調査では、主に平安期の住居址やそれに伴う遺物が発見され、その中には墨書土器も含まれるなど、小規模の調査としてはまずまずの成果が上げられたと思います。山梨市の中では東端にあたる東後屋敷地区での今回の発見は、古代可美里の範囲やそれを構成する集落の規模等を考える上で、貴重な資料になると思われます。

文献史料から得ることのできる情報には限りがありますが、埋蔵文化財の調査によって得られる情報は、調査方法や技術の進歩を考えると無限の可能性を秘めています。このような埋蔵文化財を後世に残すことは、自然環境を残すことと同じように大切なことだと思います。今後やむをえず壊される遺跡については、できるだけ多くの情報を残すよう努力していきたいと思います。

最後に今回の調査に関し、御理解を示して下さった朝日商事有限会社、並びに御指導・御協力をいただいた皆様に深く感謝申し上げ、序といたします。

平成７年３月

山梨市教育委員会
教育長　向山　保雄

例　言

1　本書は、山梨県山梨市東後屋敷字天神322番に所在する、東後屋敷遺跡の発掘調査報告書である。

2　本発掘調査は、分譲宅地造成に伴う緊急発掘調査で、朝日商事有限会社の委託を受け山梨市遺跡調査会が実施した。

3　発掘調査から本書作成に至るまで、次の諸氏・諸機関に御教示・御協力を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略）

山梨県教育委員会学術文化課　小野正文、保坂康夫

山梨県埋蔵文化財センター　長沢宏昌

帝京大学山梨文化財研究所　平野　修、河西　学

塩山市教育委員会　飯島　泉

牧丘町教育委員会　大崎文裕

4　本書の執筆・編集は山梨市教育委員会社会教育係三澤達也が行った。
なお、これらの作業を堀内博雄、小河いつゑ、深沢さつきが援けた。

5　調査に関する諸記録および出土遺物は、すべて山梨市教育委員会が保管している。

凡　例

1　遺物番号は、挿図・図板及び遺物観察表で一致する。

2　土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原　1976）を参照した。

3　挿図第２図には、国土地理院発行の１／50,000地形図「御岳昇仙峡」を使用している。

4　挿図中のレベルは標高値を示している。

5　遺物実測図中の土器断面が黒く塗りつぶしてあるものは須恵器を、器体部内外面のスクリーントーンは黒色土器を示す。

6　住居址実測図中のドットのスクリーントーンは焼土およびその範囲を示している。

目　次

序　文
例　言
第１章　調査の概要
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査組織 …… 1
　第３節　調査方法と経過 …… 2
第２章　調査地の環境
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　基本層序 …… 5
第４章　遺構と遺物
　第１節　遺　構 …… 6
　第２節　遺　物 …… 9
第５章　考　察 …… 23

挿図目次

第１図　調査区全体図 …… 2
第２図　遺跡位置図 …… 4
第３図　土層模式図 …… 5
第４図　１号住居址平面図 …… 6
第５図　２・３・５号住居址平面図 …… 7
第６図　４号住居址平面図 …… 8
第７図　土坑群平面図 …… 9
第８図　出土遺物（土師器坏・皿） …… 11
第９図　出土遺物（土師器坏・皿） …… 11
第10図　出土遺物（土師器甕） …… 12
第11図　出土遺物（土師器甕） …… 13
第12図　出土遺物（土師器甕） …… 14
第13図　出土遺物（竈・須恵器・金属器） 15
第14図　出土遺物（縄文土器） …… 16
第15図　出土遺物（縄文土器） …… 17
第16図　出土遺物（石器） …… 18
第17図　１号住居址遺物出土状況 …… 23
第18図　２・３・５号住居址遺物出土状況 24
第19図　４号住居址遺物出土状況 …… 24
第20図　掘立柱建物平面図 …… 25

図版目次

図板１ …… 27
図板２ …… 28
図板３ …… 29
図板４ …… 30
図板５ …… 31
図板６ …… 32
図板７ …… 33
図板８ …… 34
図板９ …… 35

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成６年６月、山梨市教育委員会に朝日商事有限会社（以下、朝日商事）より、宅地分譲事業を計画中につき、開発地における遺跡の有無を確認したいとの照会があった。その土地が周知の埋蔵文化財包蔵地であったため、市教育委員会では事前の届出が必要であると回答し、平成６年６月14日、朝日商事より文化財保護法第57条の２による届出がなされた。同時に市教育委員会では朝日商事の協力のもと試掘調査を実施し、遺跡の存在および範囲を確認した。

平成６年６月20日、県教育委員会より事前の発掘調査を行わなければならない旨の通知がなされ、市教育委員会では朝日商事に伝達するとともに本調査の実施を指導した。朝日商事から調査を依頼された市教育委員会は、山梨市遺跡調査会を紹介し、平成６年10月14日、山梨市遺跡調査会と朝日商事との間に委託契約が結ばれた。

平成６年10月14日、文化庁に発掘通知を提出し、平成６年10月20日より発掘調査が開始された。

第２節　調　査　組　織

１　調査主体

山梨市遺跡調査会

会　　長	向山　保雄	（市教育長）
副 会 長	植松　又次	（市文化財審議会会長）
理　　事	萩原　定徳	（市文化財審議会会長職務代理）
〃	古屋　善博	（市文化財審議会委員）
〃	雨宮　博文	（市文化財審議会委員）
〃	佐藤　幸男	（市社会教育委員）
〃	雨宮　和子	（市社会教育委員）
参　　与	保坂　康夫	（県教育委員会学術文化課）
〃	長沢　宏昌	（県埋蔵文化財センター）
監　　事	手島　　勇	（市収入役）
〃	大澤　一仁	（市企画課長）
事務局長	秋山　　向	（市教育次長）
事務局員	芦沢　　武	（市社会教育係長）
〃	三澤　達也	（市社会教育係）

2　調査担当

山梨市教育委員会　三澤達也

3　調査参加者

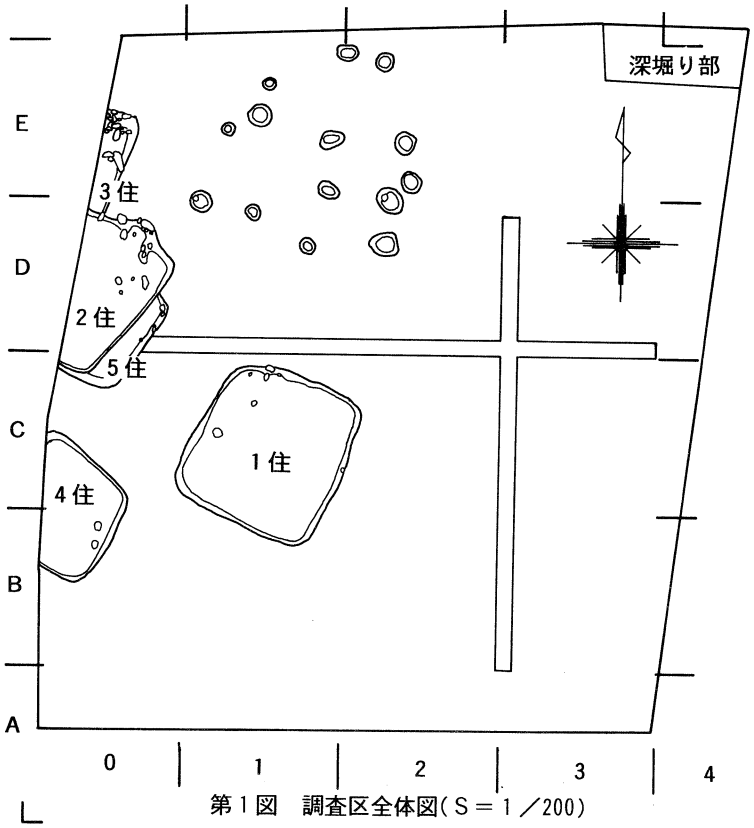
本田三夜子、林　周子、黒瀬信子、戸田ひろ、田中清昭、小河いつゑ、深沢さつき、前田紀久子、雨宮　好、雨宮久美子、深沢茂子、山下好子

第3節　調査方法と経過

発掘区の設定は、開発対象地1,141㎡のうち試掘調査で予想された範囲300㎡について行った。この発掘区をカバーするように4m四方のグリッドを設定し、X軸（南北）方向にA～E、Y軸（東西）方向に0～4とし、両者をあわせて各グリッドの呼称とした。

調査開始日の10月20日と翌21日の2日間で重機による表土除去を完了し、24日からジョレン精査および平面プランの確認を行った。調査地の西側においては住居址および土坑のプランが確認されたが、東側については同層位では確認できなかったため、サブトレンチを設定して断面の検討及び下層の状況の把握を行ったが遺構の検出には至らなかった。

遺物の取り上げに際し、原位置を保っているものに関しては、トータルステーションの座標測量機能を利用し、X座標・Y座標・Z座標（レベル）を記録している。最終的に住居祉5軒、土坑14基が検出され、調査は11月15日に終了した。



第1図　調査区全体図（S＝1／200）

第２章　調査地の環境

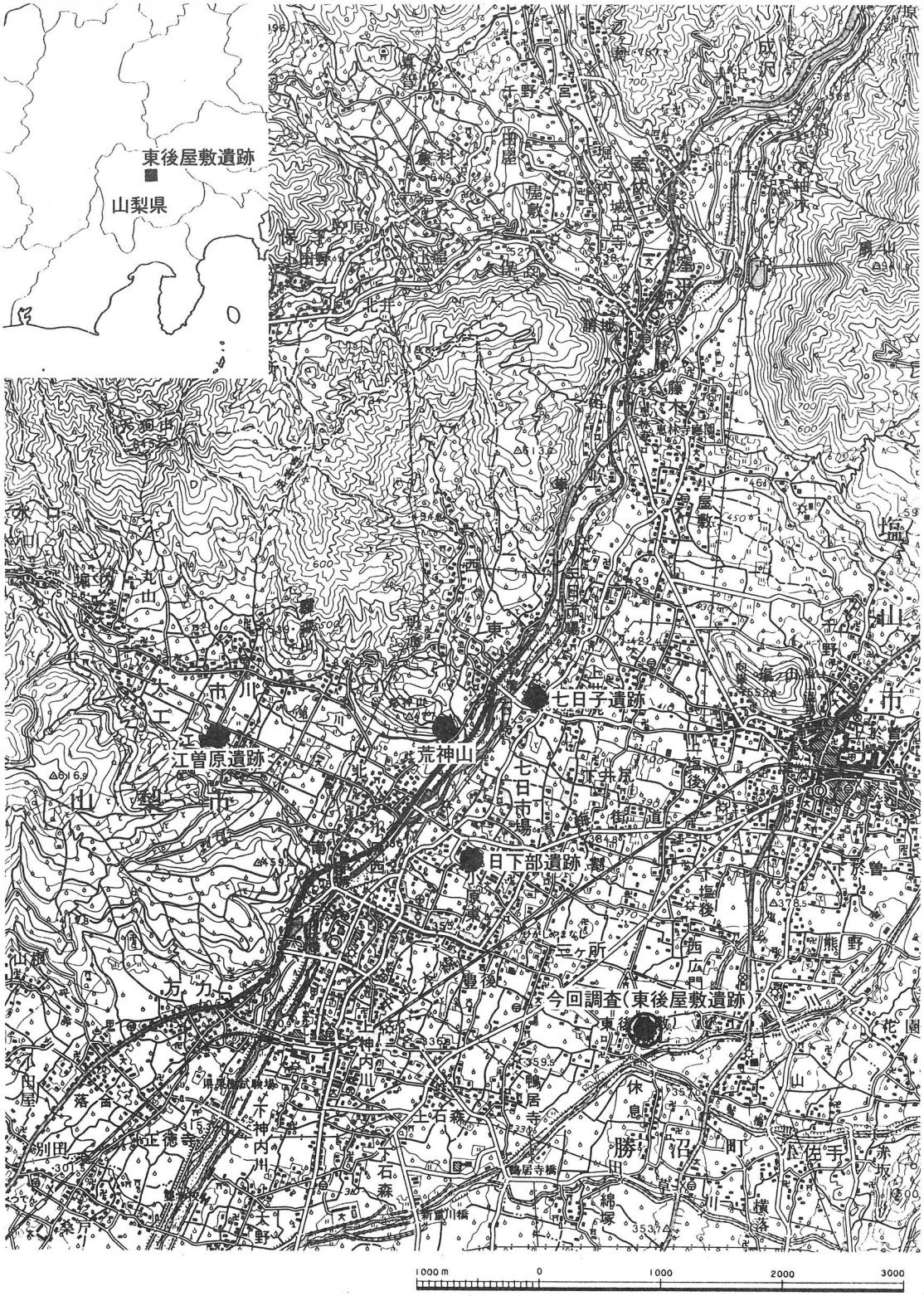
第１節　地理的環境

山梨市は、甲府盆地の北東よりに位置し、中心付近を奥秩父連峰に源を発する笛吹川が南流している。笛吹川を挟んで西側は山間地が多く、東側は笛吹川とその支流によって形成された扇状地の平坦な地形となっている。調査地の位置は、山梨市の東端で扇端部にあたり、標高は355mを測る。調査地の300m南東には市の境界の一部である重川が南西流している。調査地付近の重川流域では、扇状地を侵食する形で河岸段丘が形成されており、重川右岸の低位段丘面と調査地との比高は10mほどある。この扇状地を構成する礫層は中位段丘礫層と考えられ、更新世に形成されたものとされている。調査地付近では、礫層の上にローム層などがのっており、その厚さは合わせて1.7mほどである。

第２節　歴史的環境

山梨市内には、縄文時代から古代・中世・近世にわたる遺跡が点在し、その数は90にのぼる。さらに発掘調査や分布調査によって今後増加することが予想されるが、これらの遺跡の多くは遺物の表面採集によって認定されたものであるため、遺跡の詳細な内容が明らかなものは少ない。過去に発掘調査が行われた遺跡は、上野晴朗氏らの調査による七日子遺跡・日下部遺跡、野沢昌康氏による江曽原遺跡、山梨市教育委員会・(財)山梨文化財研究所による荒神山窯跡等がある。七日子遺跡・日下部遺跡・江曽原遺跡は、いずれも戦後昭和24年～25年に発掘調査されたもので、本県考古学史の中でも先駆的な存在である。七日子遺跡では平安期の竪穴住居址４軒などが発見され、日下部遺跡では平安期の竪穴住居址29軒と掘立柱建物址が発見されたほか土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄器・銙帯金具等遺物も多数出土している。また江曽原遺跡では多数の動植物遺体が出土したことで注目をあびた。荒神山窯跡では昭和61年に行われた発掘調査により、窯跡の可能性のある遺構３～４基が検出され、出土遺物の検討からそれらの時期として11世紀前半及び11世紀後半～12世紀前半が考えられている。

『和名抄』によると古代甲斐国には山梨・八代・巨摩・都留の四郡が配置されていた。現在の山梨市域は山梨郡に含まれており、山梨・加美・大野・栗原の各郷の一部または全部がそれにあたる。奈良県の正倉院には、「甲斐国山梨郡可美里日下部□□□絁一匹和銅七年十月」と墨書された白絁金青袋が所蔵されている。日下部という名称は現在は地名として使われており、行政上の地区名としては、南は山梨市役所周辺から北は塩山市に接するまで、西は笛吹川から東は後屋敷地区と接するまでの範囲を指す。また可美里の範囲は、山梨市の中心以北、牧丘町・三富村・塩山市の一部が考えられており、今回の調査地を含む後屋敷地区もその中に入るとする考えもある。いずれにせよ奈良時代初期にこの地区に人が居住していたことは間違いなく、今後の調査に


東後屋敷遺跡
山梨県
七日子遺跡
荒神山
江曽原遺跡
日下部遺跡
今回調査（東後屋敷遺跡）
1000 m
0
1000
2000
3000

第２図　遺跡位置図

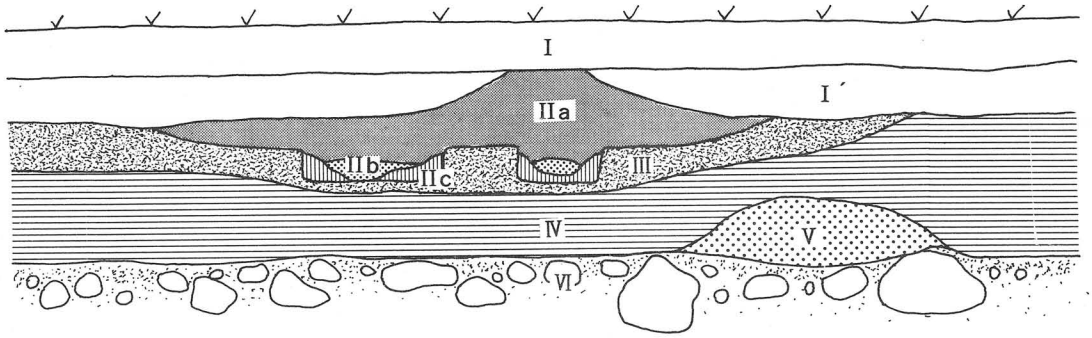
よってその範囲等が明らかにされることが期待されるところである。

第3章　基本層序

土層断面は調査区西壁を、また、ローム層以下は北壁の一部を深掘りし、観察した。深掘り部は、1.7mほど下げたところで礫層になり、その上にローム層などがのる形となっていた。ローム層以下は堆積層と思われる。

以下、各土層について説明する。

第 I 層	Hue10YR3/4暗褐色	耕作土。厚さ30㎝で調査区全体におよんでいる。
第I′層	Hue10YR3/3暗褐色	耕作土。厚さ0～30㎝。
第II a 層	Hue7.5YR4/6褐色	炭化物・赤色粒子を含む。遺構の付近に分布。遺物包含層。厚さ0～40㎝。
第II b 層	Hue7.5YR4/6褐色	住居祉内部に分布。0～15㎝。
第II c 層	Hue7.5YR4/6褐色	住居祉内部に分布。II a 層との間に黄褐色土をブロック状に挿む。炭化物・赤色粒子を含む。同層中から径2.5㎝の巨大なスコリアを検出。厚さ0～25㎝。
第 III 層	Hue7.5YR5/6明褐色	ローム層。IV層より赤みがかかる。厚さ0～30㎝。
第 IV 層	Hue10YR5/8黄褐色	ローム層。堆積構造がみられる。厚さ30～60㎝。
第 V 層	Hue5Y7/2灰白色	砂層。上部でIV層と、下部でVI層と交ざり合う。厚さ0～45㎝。
第 VI 層	Hue10YR3/4暗褐色	礫層。径30㎝以上の巨礫を含む。



第3図　土層模式図

第４章　遺構と遺物

第１節　遺　構

（１）竪穴住居址

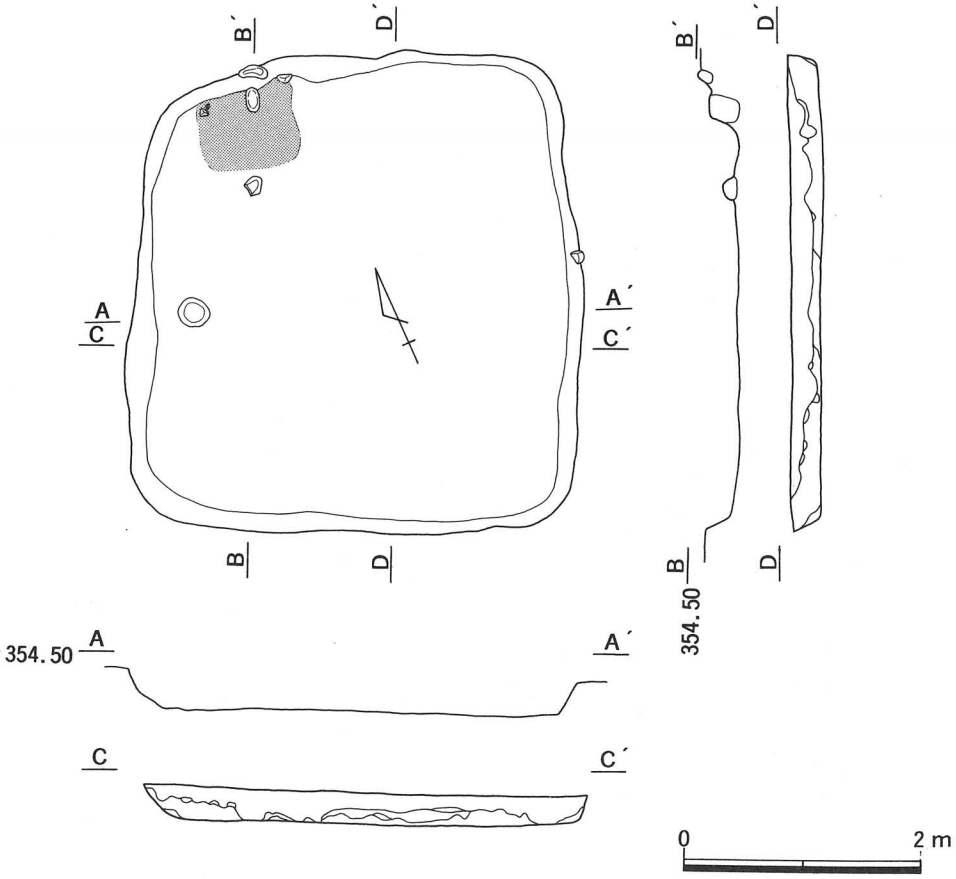
１号住居址（第４図）

Ｃ－１グリッドに位置する。重複遺構はない。平面形態は隅丸方形を呈する。規模は長軸4.2ｍ、短軸で3.5ｍを測る。主軸方向はＮ－24°－Ｅである。

床は黄褐色土を床面としており、中心からカマドにかけて1/4ほどが堅固である。壁の遺存状態は比較的良好で、壁高は最も高い西側で35㎝を測る。ピットは１つ検出されたが、深さ15㎝と浅い。壁溝は確認されなかった。

カマドは北壁の西寄りに位置し、袖石・天井石の一部が残存している。

遺物は、土師器の坏、皿・小型甕・甕・竈型土器、須恵器の甕などが出土している。



第４図　１号住居址平面図

2号住居址（第5図）

D－0グリッドに位置し、3号および5号住居址と重複している。両住居址より古い。西側は範囲外に続いており、形態等は不明である。規模は南北辺で3.9mを測る。主軸方向はN－32°－Eである。

床は黄褐色土を床面としており、南側の一部が軟弱である以外は全体的に固くしまっている。壁高は北側で37㎝を測る。壁溝・柱穴は検出されなかった。

カマドは北壁のやや東寄りに位置し、両袖石・天井石の一部および支脚石が残存している。

遺物は、土師器の坏、皿・甕・小型甕、両面黒色土器の高台皿、須恵器の壺、金属器等が出土している。

3号住居址（第5図）

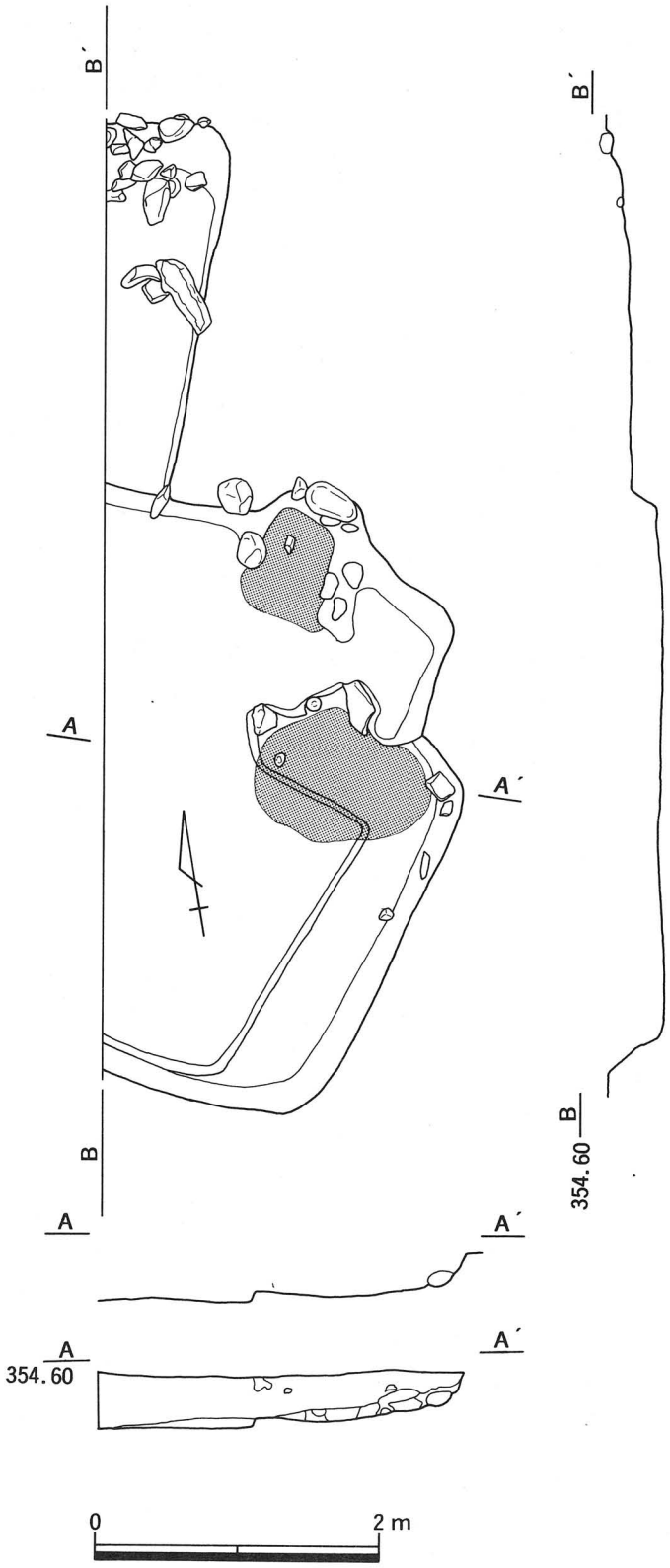
E－0グリッドに位置し、2号住居址と重複している。2号住居址より新しい。本住居址の西側大部分は調査範囲外に延びており、規模・形態等詳細は不明である。

北側の覆土および床面に、袖石および天井石として使用されていたと思われる、拳大から人頭大で円形度の低い石材が散乱している。

遺物は土師器の坏と金属器の刀子が出土している。

5号住居址（第5図）

C－0・D－0グリッドに位置し、2号住居址と重複している。



第5図　2・3・5号住居址平面図

2号住居址より新しい。当初2号住居址の一部と考えられたため、2号住居址の床面を追う形で掘りすすめていったところ、これよりも数㎝高いレベルで堅固な床面が確認された。さらに焼土と石材が発見され、2号住居址を東壁で切っていることを確認し、新たに5号住居址とした。このため床は、カマド周辺の堅固な部分と2号住居址と重なり合わない東側の部分のみが確認されたにとどまった。平面形態は隅丸方形を呈すと思われ、規模は南北辺で2.9mを測る。主軸方向はN－31°－Eである。壁高は東側で34㎝を測る。

カマドは石材の散乱と焼土の分布によってカマドと確認できる程度で、北壁やや東寄りに位置している。

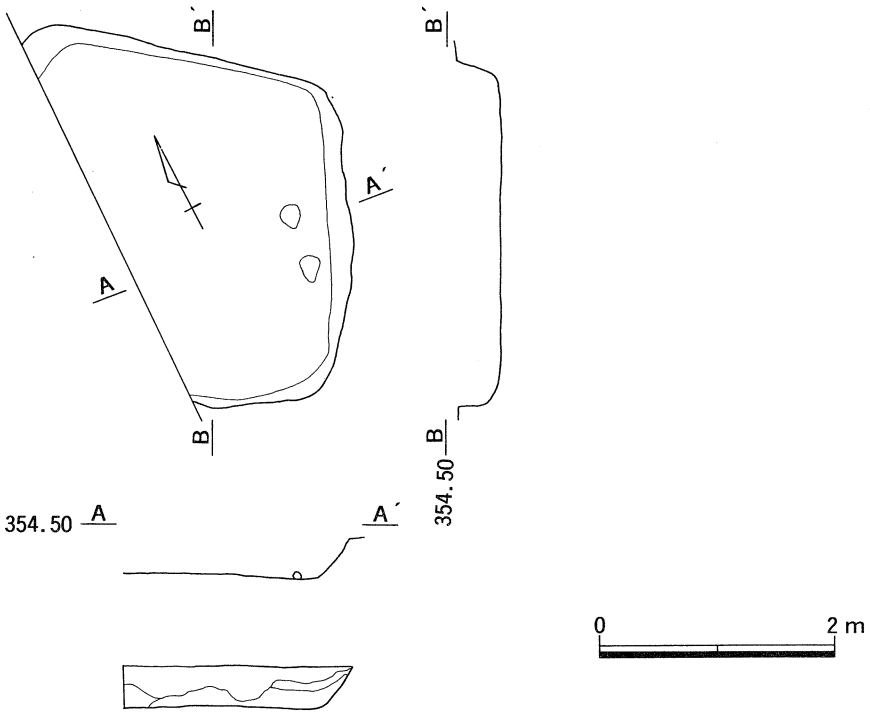
遺物は土師器の坏、皿・甕・小型甕・竈型土器、須恵器の壺などが出土している。

4号住居址（第6図）

B－0・C－0グリッドに位置しており、重複遺構はない。西側が調査範囲外に続いているが、平面形態は隅丸方形を呈すると思われる。規模は南北辺で2.7m、東西辺で2.8mを測る。主軸方向はN－27°－Eである。

床は黄褐色土を床面とし、とくに堅固な面は確認されなかった。壁高は北側で38㎝を測る。壁溝・柱穴は検出されなかった。カマドは調査範囲内では確認されなかった。

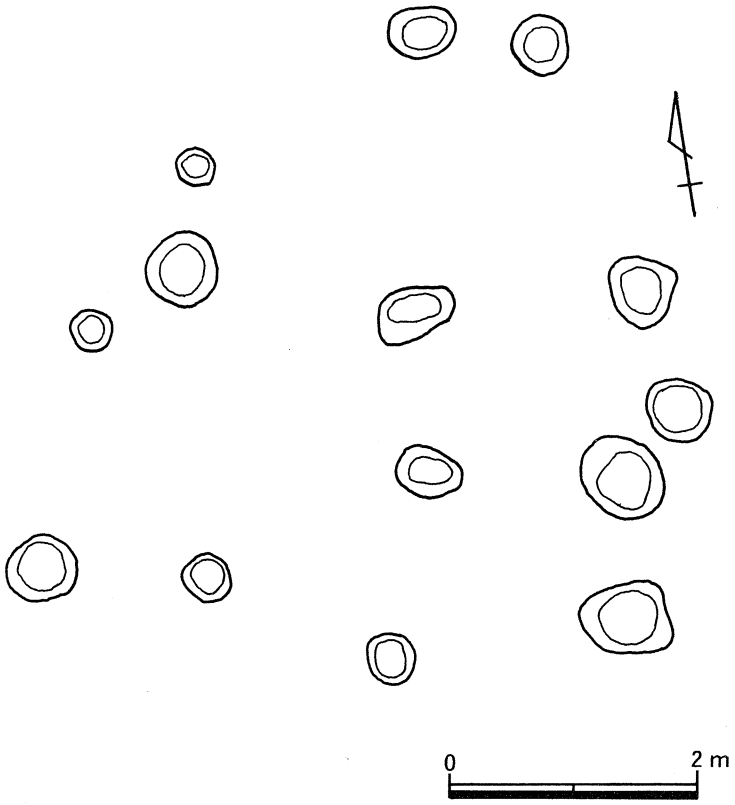
遺物は土師器の坏、皿・甕、須恵器の甕などが出土している。



第6図　4号住居址

（2）土坑（性格不明ピット）（第7図）

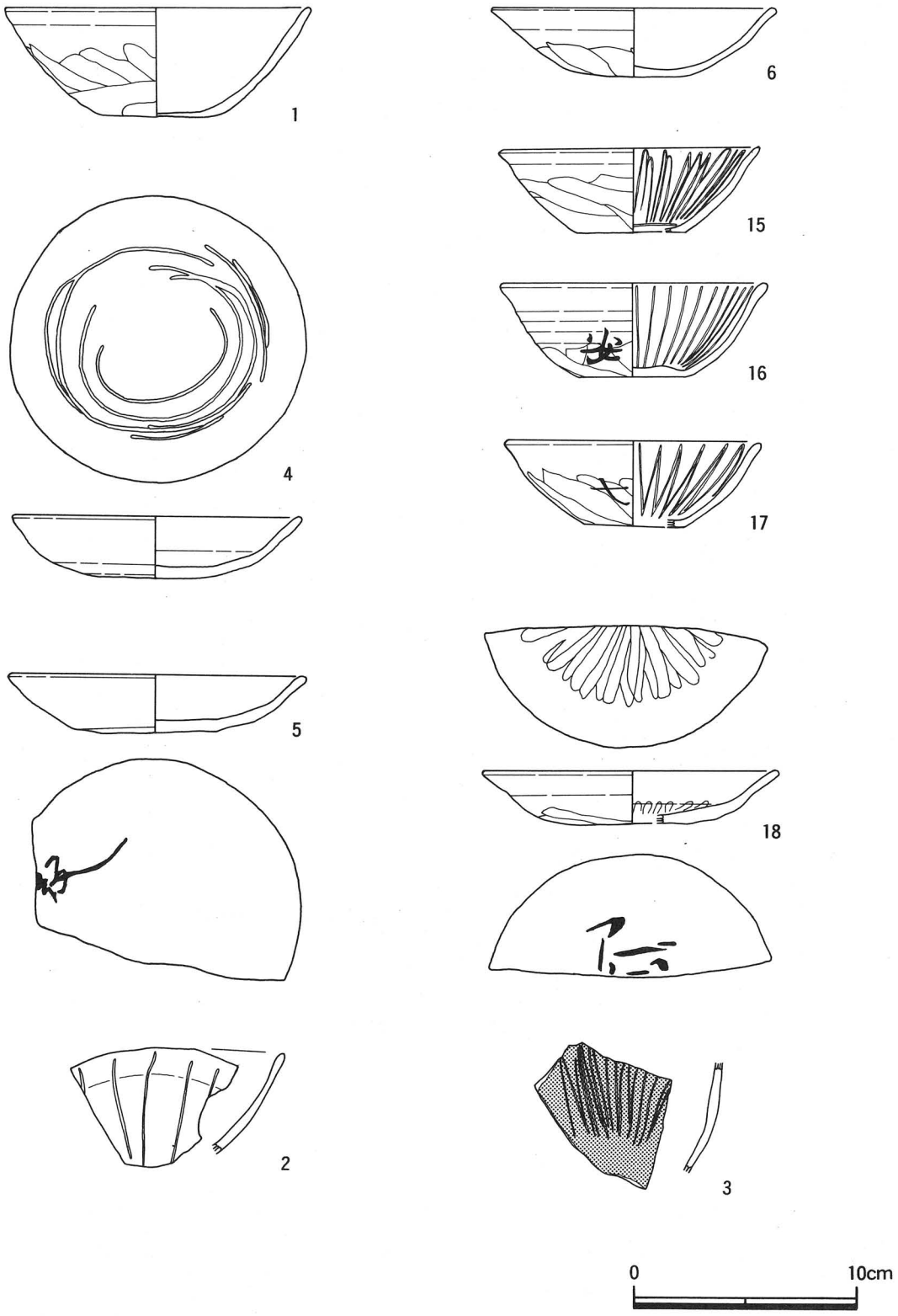
本調査で検出された土坑は合計14基であり、D－1・D－2・E－1・E－2の各グリッドに集中的に分布する。全て時代・性格ともに不明である。平面形態は不整円形・不整楕円形を呈し、規模は大きいもので径80㎝、小さいもので径30㎝ほどである。伴出遺物、柱痕跡はともにない。



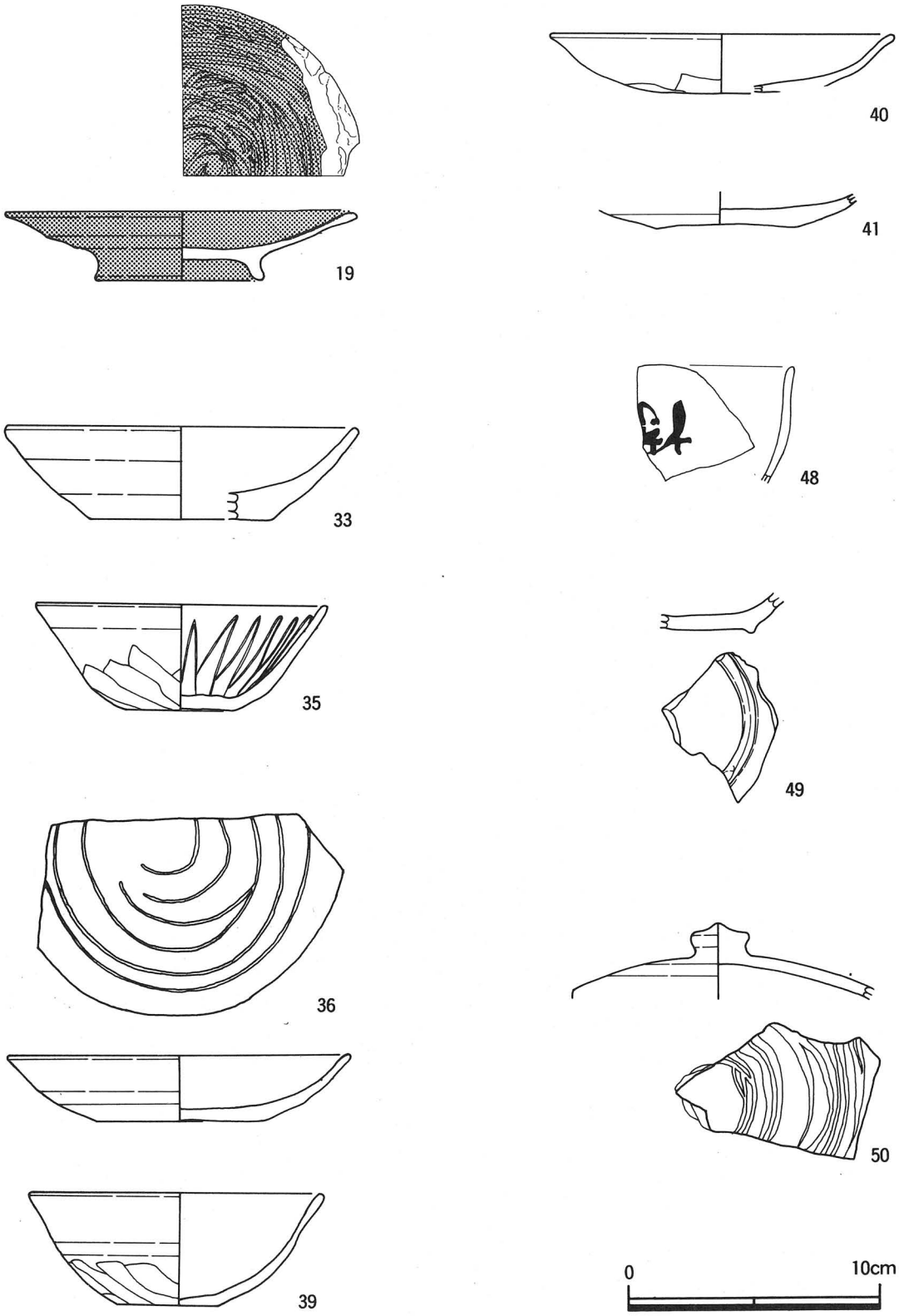
第7図　土坑群平面図

第2節　遺　物

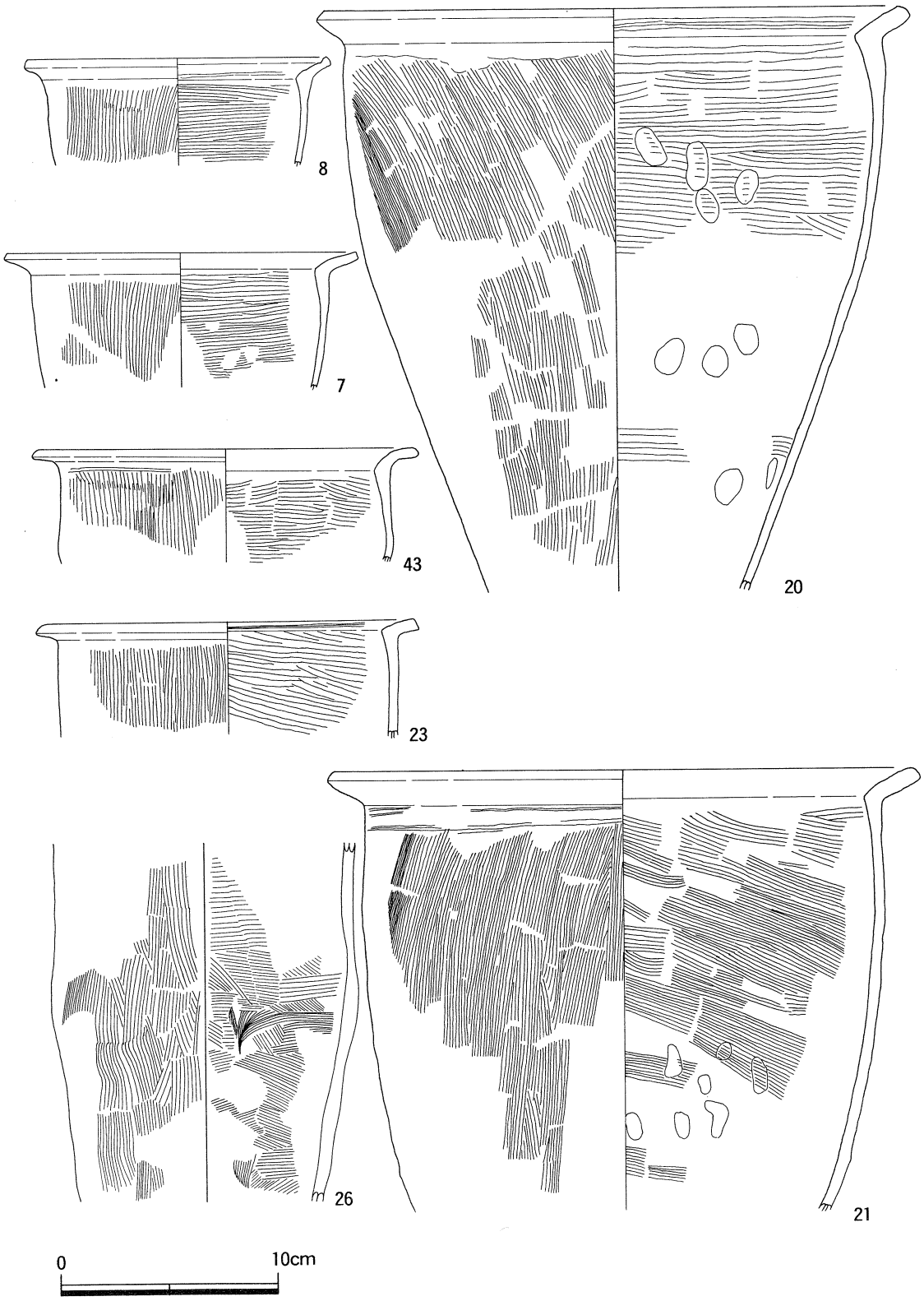
本調査では、土器・石器・金属器が出土している。土器の種別は、縄文土器・土師器・須恵器であり、量的には平安時代の土師器・須恵器が多く、縄文土器は遺構に伴うものはない。個々の遺物については観察表にその特徴を記載した。なお表中、出土地点が住居址になっているものには覆土から出土したものを含んでおり、出土状況については第17・18・19図に示した。



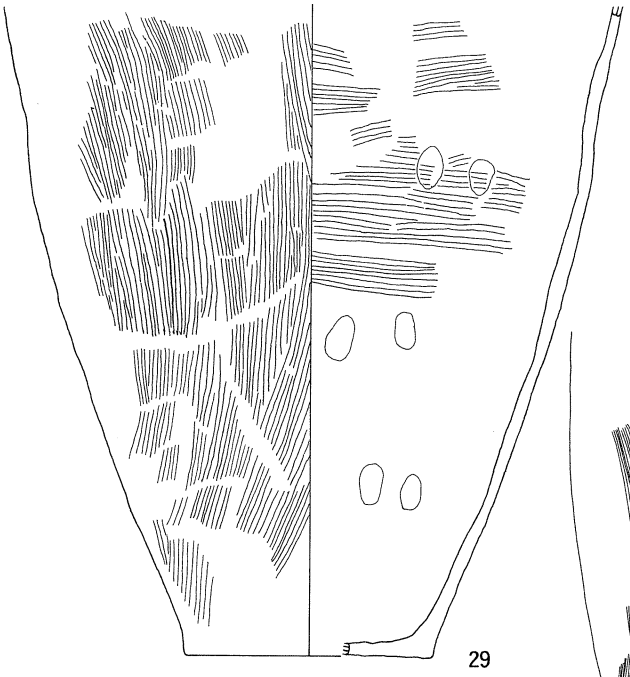
第8図　出土遺物(土師器坏・皿)

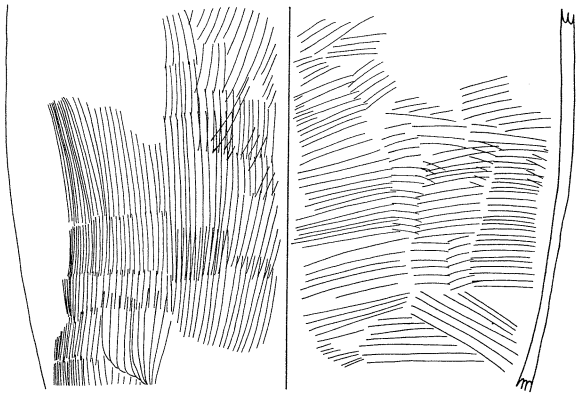


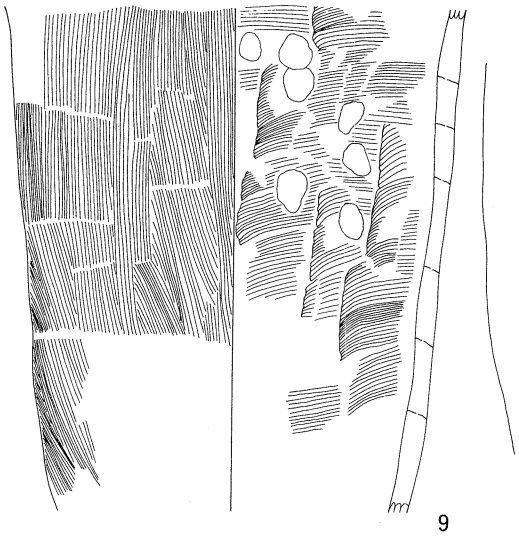
第 9 図　出土遺物(土師器坏・皿)

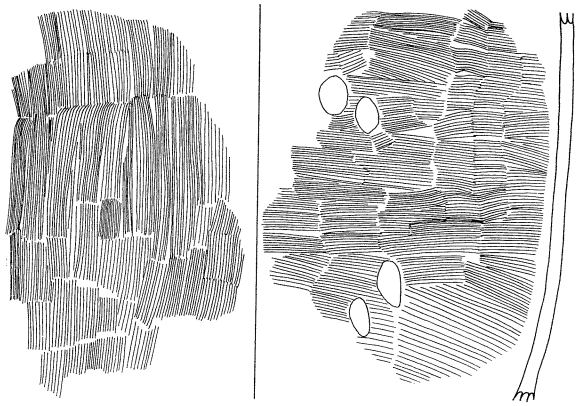


第10図　出土遺物(土師器甕)

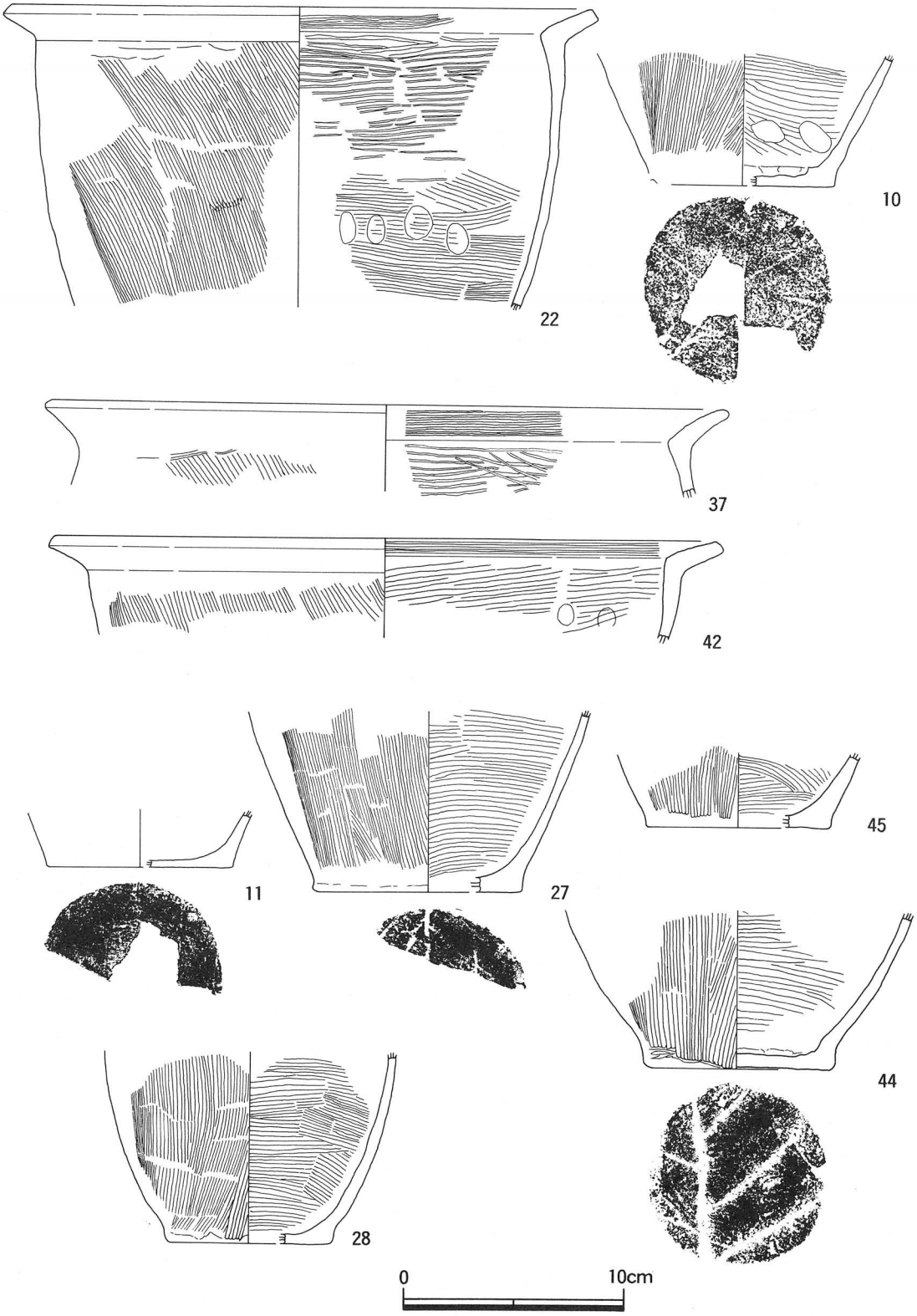




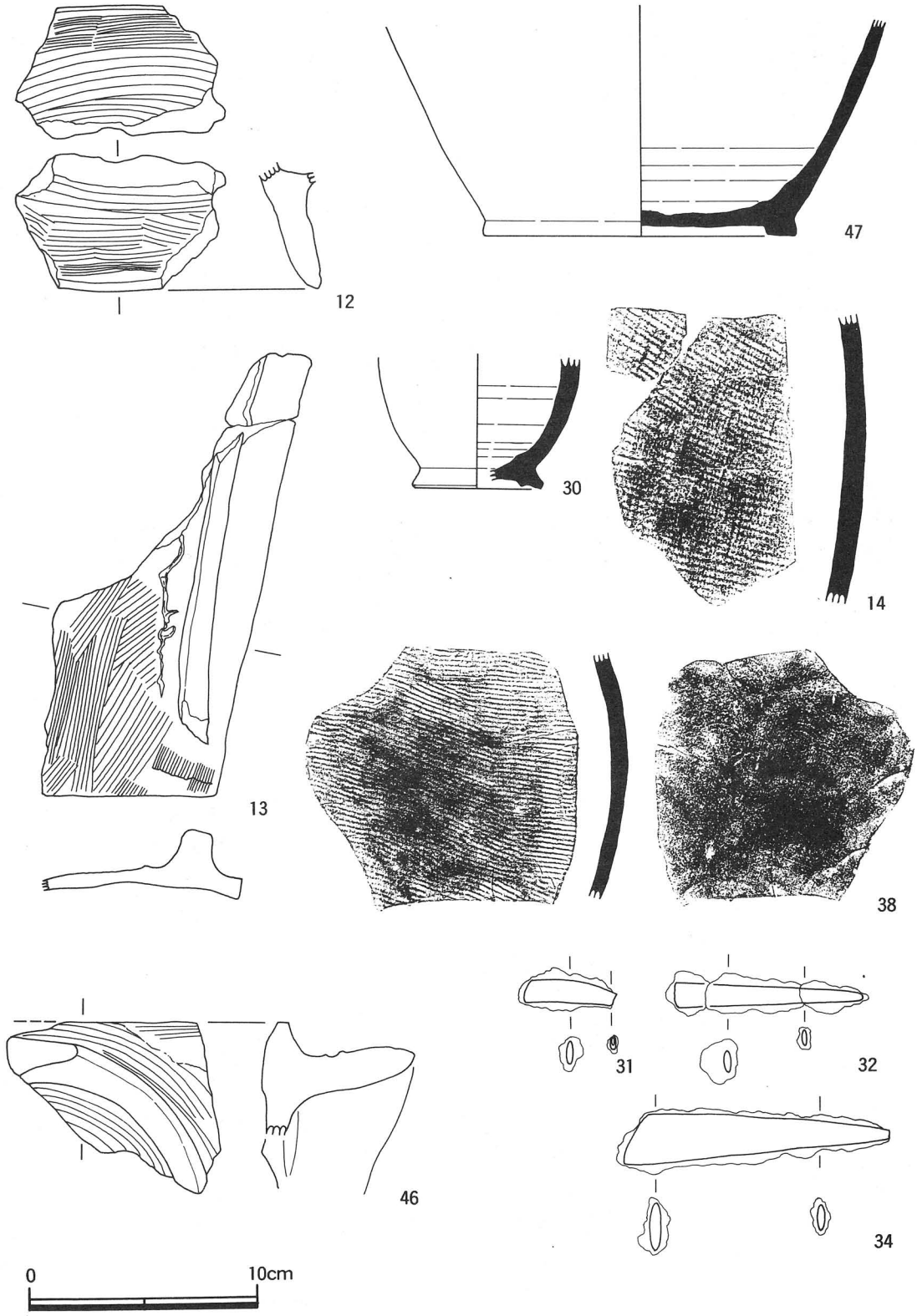




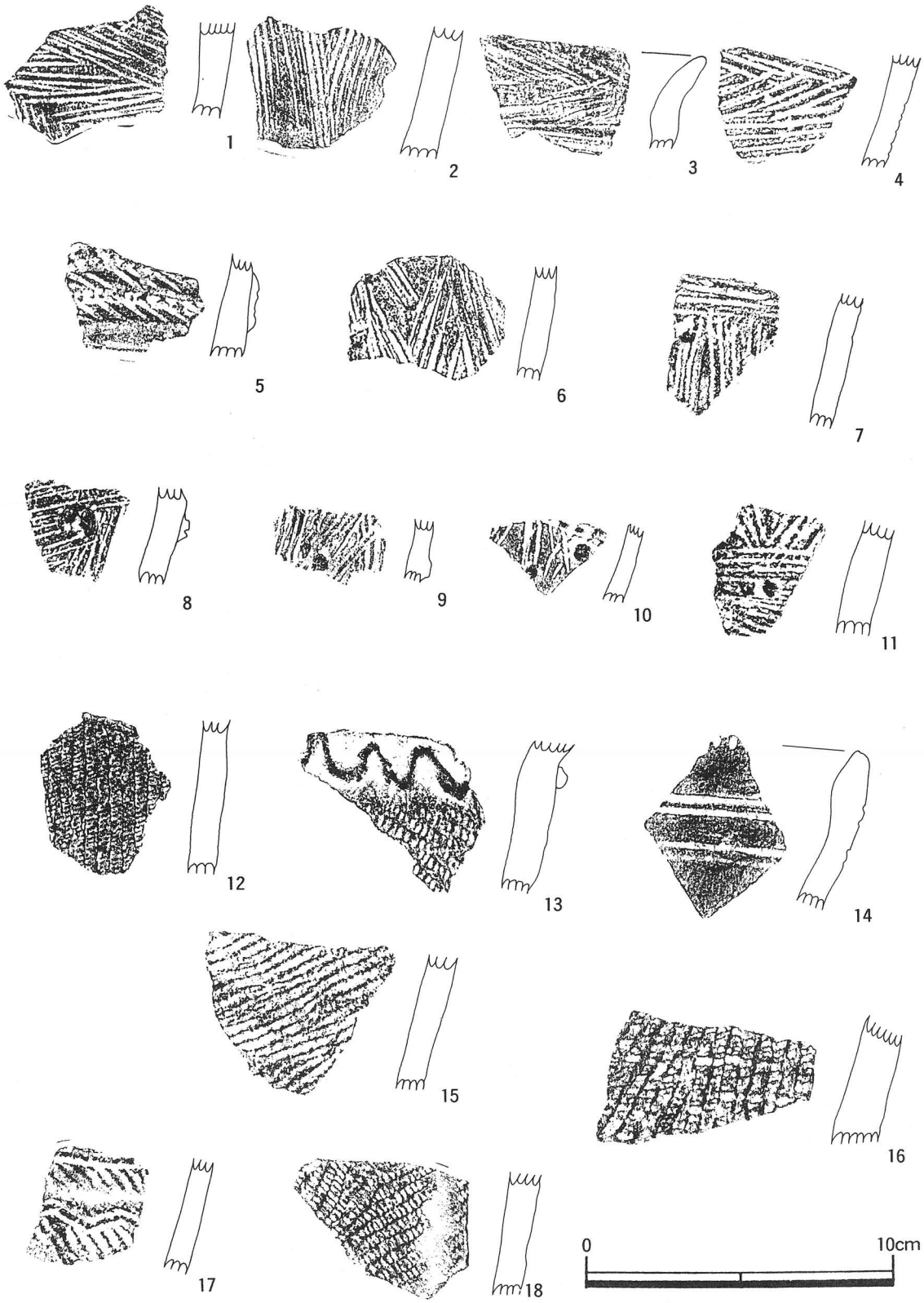
第11図　出土遺物(土師器甕)



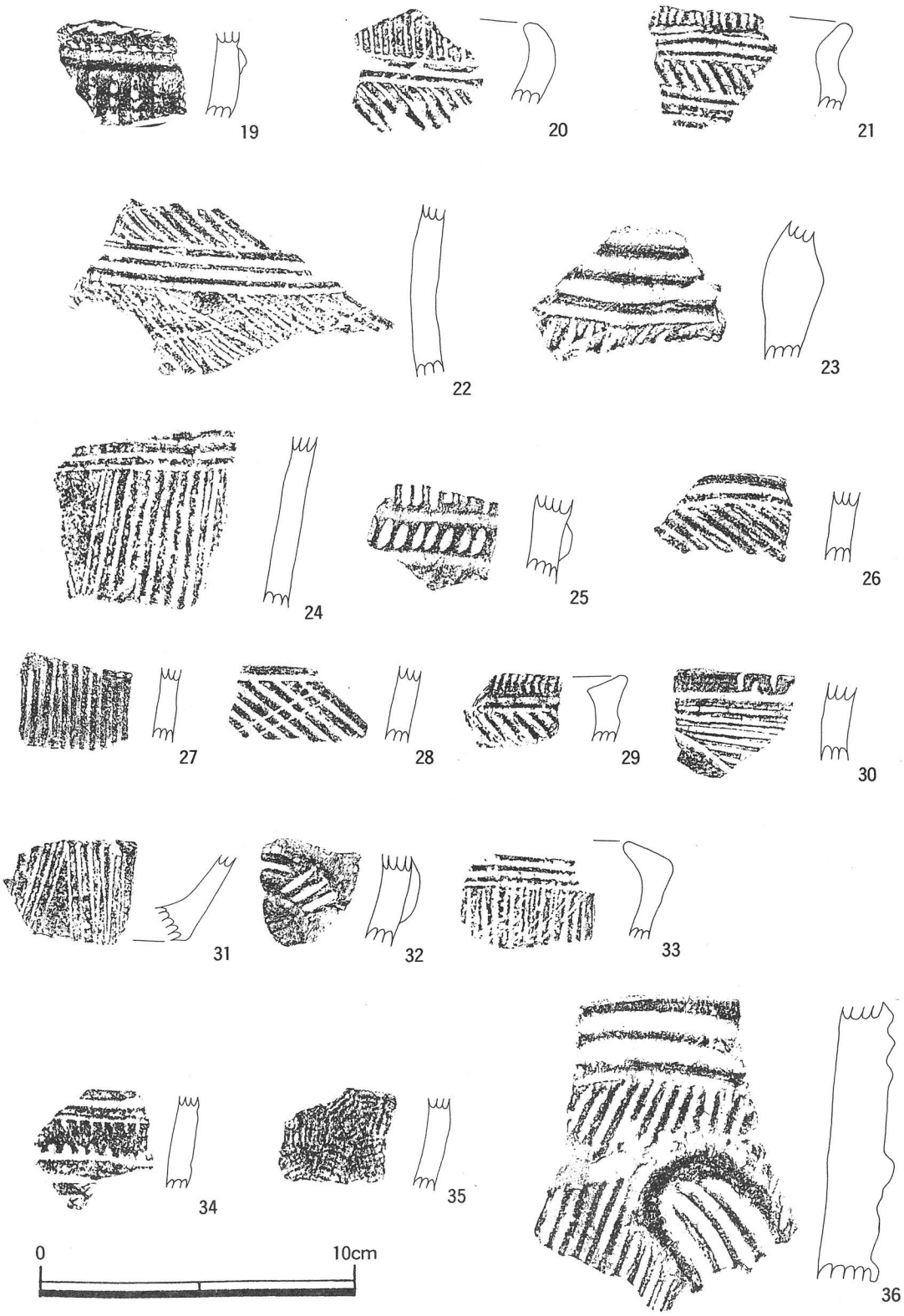
第12図　出土遺物(土師器甕)



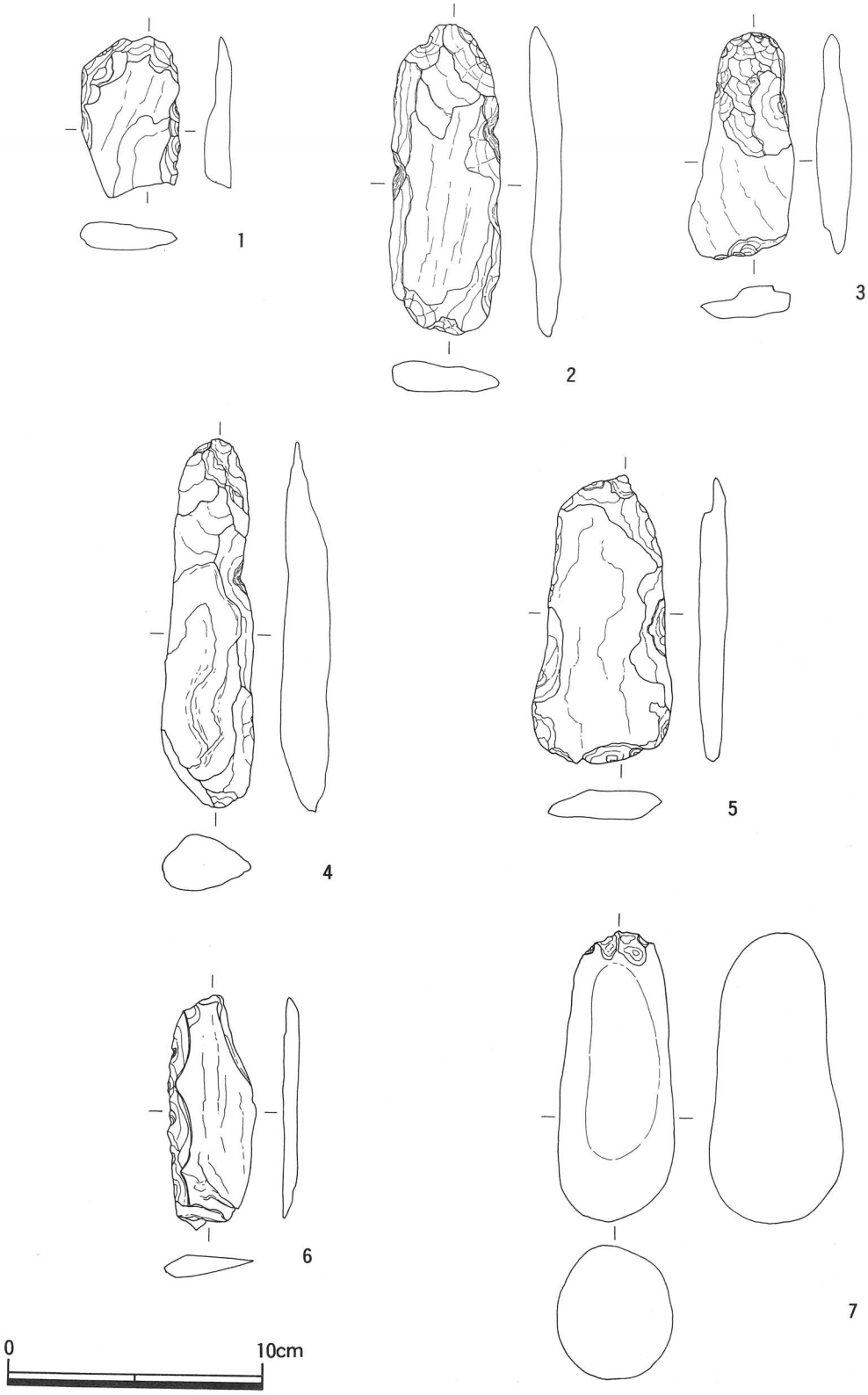
第13図　出土遺物(竈・須恵器・金属器)



第14図　出土遺物(縄文土器)



第15図　出土遺物(縄文土器)



第16図　出土遺物(石器)

第１表　平安時代遺物観察表

（法量は口径・底径・器高の順。金属器は長さ・幅・厚さの順。――は計測不能、( )は推定値）

番号	器　種	出土地点	法量cm	残存	外面調整	内面調整	底部	色調	胎土	備考
1	土師器 坏	１号住	(13.6) 5.4 4.8	１／２	ロクロナデ手持ヘラ削り	ロクロナデ	手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	
2	土師器 坏	１号住	―― ―― ――	１／６	ロクロナデ手持ヘラ削り	ロクロナデ放射状暗文		橙色	赤色粒子	
3	土師器 (甲斐型黒色土器)坏	１号住	―― ―― ――	１／６	ロクロナデ手持ヘラ削り	ロクロナデ放射状暗文黒色処理	回転ヘラ削り	にぶい黄褐色	赤色粒子	
4	土師器 皿	１号住	13.0 (5.0) 2.8	ほぼ完	ロクロナデ回転ヘラ削り	ロクロナデ渦巻状暗文	回転ヘラ削り	回転ヘラ削り	褐色	赤色粒子
5	土師器 皿	１号住	13.3 4.7 2.7	３／５	ロクロナデ回転ヘラ削り	ロクロナデ	回転ヘラ削り	橙色	赤色粒子・石英・長石・金雲母を含み粗	体部外面墨書「役」カ
6	土師器 皿	１号住	(12.7) 4.5 3.1	１／２	ロクロナデ手持ヘラ削り	ロクロナデ	手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	
7	土師器 小型甕	１号住	(16.3) ―― ――	口縁部破片	縦ハケ	横ハケ		明赤褐色～黒褐色	金雲母	
8	土師器 小型甕	１号住	(14.2) ―― ――	口縁部破片	縦ハケ	横ハケ		明赤褐色～黒褐色	石英・長石・金雲母	
9	土師器 甕	１号住	―― ―― ――	体部破片	縦ハケ	横ハケ指頭痕		明赤褐色外面褐色	長石・金雲母	
10	土師器 甕	１号住	―― 8.4 ――	底部	縦ハケ	横ハケ指頭痕黒色処理か	木葉痕	明赤褐色～黒褐色(内面褐色)	長石・金雲母	
11	土師器 甕	１号住	―― (8.5) ――	底部破片			木葉痕	褐色	長石・金雲母	
12	土師器 竈型土器	１号住	―― ―― ――	小破片				明赤褐色～黒褐色		
13	土師器 竈型土器	１号住	―― ―― ――	底部破片	縦ハケ	横ハケ指頭痕		明赤褐色～黒褐色	長石・金雲母・黒雲母	
14	須恵器 甕	１号住	―― ―― ――	体部破片	叩き			青灰色		
15	土師器 坏	２号住	(11.6) (5.0) 3.7	１／４	ロクロナデ手持ヘラ削り	花弁状暗文		橙色	赤色粒子	口縁部に黒班
16	土師器 坏	２号住	11.9 4.8 4.2	１／３	ロクロナデ手持ヘラ削り	ロクロナデ放射状暗文	手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	体部外面墨書「安」カ
17	土師器 坏	２号住	(11.5) (4.5) 3.8	１／３	ロクロナデ手持ヘラ削り	ロクロナデ花弁状暗文		橙色	赤色粒子	体部外面墨書「七」
18	土師器 皿	２号住	(13.2) (5.0) 2.3	１／３	ロクロナデ手持ヘラ削り	ロクロナデみこみ部花弁状暗文	手持ヘラ削り	橙色		底部外面墨書
19	土師器 (黒色土器) 高台皿	２号住	13.8 6.6 2.7	５／６	ロクロナデ黒色処理	ロクロナデ後ヘラミガキ(渦巻状)黒色処理	削り出し高台	黒色(蒸着か)	密	両面黒色土器
20	土師器 甕	２号住	27.4 ―― ――	１／４	縦ハケ	横ハケ指頭痕		明赤褐色～黒褐色	石英・長石・金雲母	内面に付着物29と同一個体の可能性あり

（法量は口径・底径・器高の順――金属器は長さ・幅・厚さの順。――は計測不能、（ ）は推定値）

番号	器　種	出土地点	法量cm	残存	外面調整	内面調整	底部	色調	胎土	備考
21	土師器甕	2号住	27.3 ―― ――	1／7	縦ハケ	横ハケ 指頭痕		にぶい橙色～黒褐色	長石・黒雲母・金雲母	
22	土師器甕	2号住	26.8 ―― ――	口縁部破片	縦ハケ	横ハケ 指頭痕		明赤褐色～黒褐色	長石・金雲母	
23	土師器小型甕	2号住	16.8 ―― ――	口縁部破片	縦ハケ	横ハケ		明赤褐色～黒褐色	長石・金雲母	
24	土師器甕	2号住	―― ―― ――	体部破片	縦ハケ	横ハケ 指頭痕		にぶい褐色 外面褐色～黒褐色	長石・黒雲母・金雲母	
25	土師器甕	2号住	―― ―― ――	体部破片	縦ハケ	横ハケ 指頭痕		明赤褐色～黒褐色	長石・金雲母	
26	土師器甕	2号住	―― ―― ――	体部破片	縦ハケ	横ハケ 指頭痕		明赤褐色～黒褐色	長石・金雲母	
27	土師器甕	2号住	―― 8.5 ――	底部破片		横ハケ	木葉痕	にぶい褐色 外面褐色～黒褐色	金雲母	
28	土師器甕	2号住	―― 7.2 ――	底部破片	縦ハケ	横ハケ	木葉痕	褐色～黒褐色	長石・金雲母	
29	土師器甕	2号住	―― 9.3 ――	1／8	縦ハケ	横ハケ 指頭痕	木葉痕	明赤褐色～黒褐色	石英・長石・金雲母	20と同一個体の可能性あり
30	須恵器壺	2号住	―― (5.7) ――	底部小破片	ロクロナデ	ロクロナデ		灰黄色		外面に自然釉付着
31	金属器刀子か	2号住	4.8 1.8 1.0							
32	金属器刀子	2号住	8.9 1.8 1.6							
33	土師器坏	3号住	(13.9) ―― 3.7	1／6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	褐色	やや粗	
34	金属器刀子	3号住	12.0 2.1 1.3	茎部欠く						
35	土師器坏	4号住	11.5 4.3 4.2	2／3	ロクロナデ手持ヘラ削り	ロクロナデ花弁状暗文	手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	
36	土師器皿	4号住	13.8 6.6 2.6	1／2	ロクロナデ回転ヘラ削り	ロクロナデ渦巻状暗文	回転糸切り後回転ヘラ削り	橙色	赤色粒子	
37	土師器甕	4号住	31.0 ―― ――	口縁部小破片		横ハケ		褐色～黒褐色	長石・金雲母	
38	須恵器甕	4号住	―― ―― ――	体部破片	平行叩き	当て具痕（同心円文）		灰白色		
39	土師器坏	5号住	11.6 4.0 4.4	3／4	ロクロナデ手持ヘラ削り	ロクロナデ	手持ヘラ削り	橙色	赤色粒子	
40	土師器皿	5号住	(13.5) (5.5) 2.3	1／4	ロクロナデ手持ヘラ削り	ロクロナデ	回転糸切り	橙色	赤色粒子	

（法量は口径・底径・器高の順――金属器は長さ・幅・厚さの順。―― は計測不能、（ ）は推定値）

番号	器　種	出土地点	法量cm	残存	外面調整	内面調整	底部	色調	胎土	備考
41	土師器 皿	5号住	―― 5.5 ――	1／4	回転ヘラ削り		回転ヘラ削り	橙色	赤色粒子・石英・長石を含み粗	
42	土師器 甕	5号住	30.6 ―― ――	口縁部破片	縦ハケ	横ハケ 指頭痕		明赤褐色～黒褐色	長石・黒雲母・金雲母	
43	土師器 小型甕	5号住	16.8 ―― ――	口縁部小破片	縦ハケ	横ハケ		褐色～黒褐色	長石	
44	土師器 甕	5号住	―― 8.5 ――	底部完存	縦ハケ	横ハケ 指頭痕	木葉痕	明赤褐色～黒褐色	長石・黒雲母・金雲母	
45	土師器 甕	5号住	―― 8.2 ――	底部破片	縦ハケ	横ハケ	木葉痕	褐色～黒褐色	石英・長石・金雲母	
46	土師器 竈型土器	5号住	―― ―― ――	小破片				明赤褐色～黒褐色		
47	須恵器 壺	5号住	―― 12.6 ――	底部片 1／8	回転ヘラ削り	ロクロナデ	回転ヘラ削り	灰色	黒色粒子	
48	土師器 坏	D－3 （5住 真上）	―― ―― ――	小破片	ロクロナデ	ロクロナデ		橙色	赤色粒子	体部外面逆位墨書「持」
49	土師器 高台坏 （または	表土	―― ―― ――	小破片	回転ヘラ削り	ロクロナデ	回転ヘラ削り	橙色		
50	土師器 蓋	C－1 （5住 真上）	―― ―― ――	1／6	ロクロナデ回転ヘラ削り	ロクロナデヘラナデ		橙色		

第2表　縄文土器観察表

番号	出土地点	層位	特　徴	色調	胎土
1	B－0	I′	櫛描文	にぶい黄褐色	石英・長石
2	C－0	I	櫛描文	にぶい黄橙色	長石
3	B－0	I′	櫛描文	にぶい黄橙色	長石
4	B－2	I′	平行沈線文	にぶい黄橙色	石英・長石
5	C－3	I′	隆帯状にペン先状工具による押し引き、さらにその上に斜位平行沈線	にぶい黄橙色	石英・長石・金雲母
6	B－1	I′	櫛描文	にぶい黄褐色	石英・長石
7	E－2	I	ヘラによる沈線文・ボタン状貼付文	黄褐色	長石
8	D－1	I	ヘラによる沈線文・ボタン状貼付文	にぶい黄橙色	黒雲母
9	E－1	I	ヘラによる沈線文・ボタン状貼付文	にぶい黄橙色	長石
10	C－1	Ia	ヘラによる沈線文・ボタン状貼付文	にぶい黄褐色	長石・黒雲母

番号	出土地点	層位	特徴	色調	胎土
11	F－2	I′	ヘラによる沈線文・ボタン状貼付文	褐色	長石・金雲母
12	D－0	I	単節縄文	明褐色	石英・長石
13	C－1	IIa	粘土紐による蛇行貼付文、その下に斜行縄文(RL)	明褐色	石英・長石・金雲母
14	D－2	I′	口縁部。その下に半截竹管による横位平行沈線文	褐色	長石・金雲母
15	D－2	I	無節縄文(L)	橙色	長石
16	D－1	I		明褐色	石英・長石・金雲母
17	D－1	I	無節縄文の地文上に波状平行沈線文	明黄褐色	長石
18	D－0	IIa			石英・長石・黒雲母
19	C－0	I′	ペン先状工具による押し引き	にぶい黄橙色	長石
20			口縁部。斜位平行沈線文	明褐色	長石
21	E－1	I	口縁部。横位平行沈線文・斜位平行沈線文。口唇部に爪形文	褐色	長石・金雲母
22	F－1	IIa	斜位平行沈線文・横位平行沈線文・ヘラによる沈線文	橙色	長石・金雲母
23	A－1	I′	上部横位沈線文、その下に斜位沈線文	明黄褐色	長石・金雲母
24	C－2	I′	上部横位平行沈線文、その下に縦位平行沈線文	橙色	長石
25	B－2	I′	隆帯文上に刺突文	にぶい黄橙色	石英・長石
26			上部横位平行沈線、その下に斜位平行沈線文	明褐色	長石
27	B－1	I′	縦位平行沈線文	にぶい黄橙色	長石
28	D－1	I	上部横位平行沈線文、その下に斜位平行沈線文	明褐色	長石
29	D－2	I′	口縁部。口唇部に爪形文。横位平行沈線・斜位平行沈線文	にぶい褐色	長石
30	E－1	I	平行沈線文	黄褐色	長石
31	C－0	I	底部。縦位平行沈線文	明褐色	長石
32			隆帯文上に刺突文	明褐色	石英・金雲母
33	A－2	I′	口縁部。口唇部にも平行沈線文	明褐色	長石
34	D－0	I′	平行沈線文。ペン先状工具による押し引き	褐色	長石・金雲母
35	D－1	I′	角張ったヘラ状工具による爪形文	明褐色	石英・長石
36	D－3	I I′	上部横位平行沈線文・下部斜位平行沈線文。隆帯による楕円形区画内に平行沈線。接合。	黄褐色	石英・長石

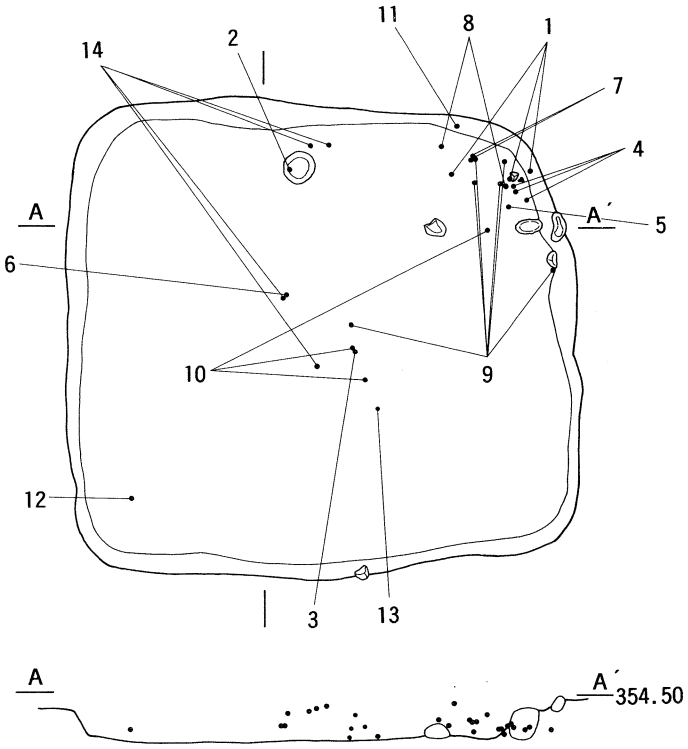
第３表　石器観察表

番号	種　　類	出土地点	層位	長さ（㎝）	幅（㎝）	厚さ（㎝）	石　　材
1	打製石斧	E－2	I	6.3	3.8	1.0	ホルンフェルス
2	打製石斧	E－3	I	12.3	4.5	1.1	ホルンフェルス
3	打製石斧	C－0	I′	8.9	4.0	1.4	ホルンフェルス
4	打製石斧	B－3	I′	14.7	3.0	2.0	ホルンフェルス
5	打製石斧	C－2	I	11.4	5.4	1.1	ホルンフェルス
6	打製石斧	D－1	I	9.1	3.4	0.6	粘板岩
7	磨　　石	C－0	I′	11.5	4.5	5.1	花崗岩

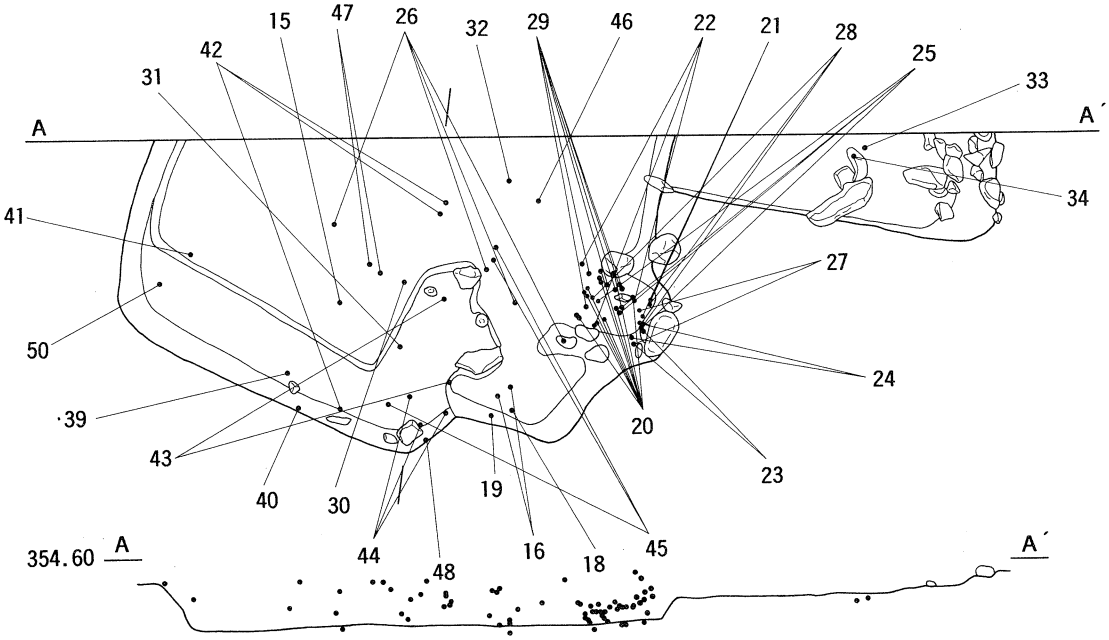
第５章　考　察

（１）遺構の年代

まず１号住居址の遺物から見てみると、第８図１は甲斐型坏で、口径13.6㎝・底径5.4㎝で、体部外面下半の手持ヘラ削り、内面の暗文が見られないなどの要素から、甲斐編年[(1)]のXI期[(2)]に当るものと思われ、２は、内面の暗文と肥厚した口縁部とをもつことからX期に当ると思われる。皿では、４が口径、底部および体部外面下部の回転ヘラ削り、内面の渦巻状暗文、口縁部と体部との境の弱い屈曲などの要素からX期[(3)]、６が口径、底部および体部外面の手持ヘラ削りなどの要素からX～XI期に当てられる。また、小型甕の第10図７・８は、口縁部が体部に比べ肥厚していることからXI期[(4)]に当ると思われる。これらの出土状況をみてみると、１・４・７・８はカマドおよびその周辺から出土し、床面からの出土を含ん



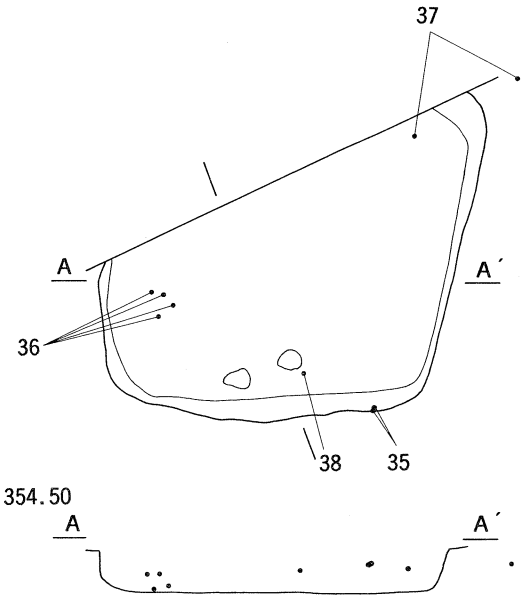
第17図　１号住居址遺物出土状況



第18図　2・3・5号住居址遺物出土状況

でいるのに対して、2・6はカマドから離れ、床面からも浮いた状態で出土している。しかし、時期的にはむしろ2・6の方が古いものであることを考えると、1号住居址内の覆土の堆積は長い時間をかけたものではないと思われる。いずれにせよ時期的に大きな差があるものは出土しておらず、遺構の時期としては甲斐編年のX～XI期、年代にして9世紀後半から10世紀前半が当てられる[5]と思われる。

2号住居址出土の坏第8図15～17は、口径・底径、内面の暗文、体部外面の手持ヘラ削りなどの要素から、いずれも甲斐編年のX期に当ると思われ、18の皿は、口径、みこみ部の花弁状暗文、底部の手持ヘラ削り、内面の口縁部と体部との境の弱い屈曲などの要素からIX～X期に当ると思われる。また、第10・12図の甕20・21・22および小型甕23は、厚い口縁の形態からXI期に当ると思われる。出土状況を見ると、26を除いたすべての甕がカマド内から出土しているこ



第19図　4号住居址遺物出土状況

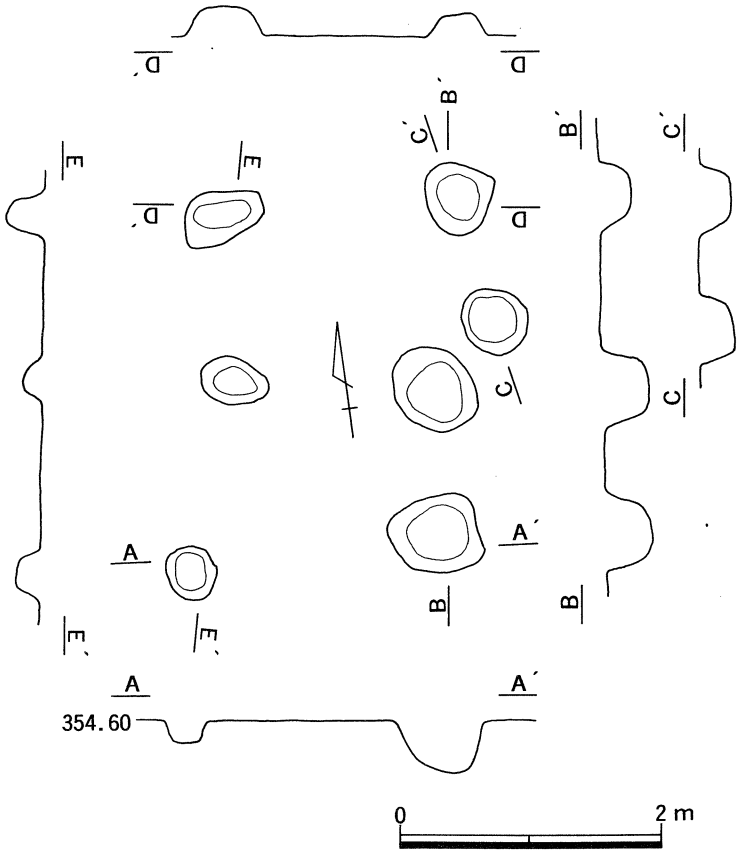
とがわかる。また坏・皿では15～18、甕では20・22・23・25・26・28・29が床面からの出土であり、2号住居址の時期を決定付ける遺物になると思われる。よって遺構の時期としては、器種によって若干の時期差があるものの、概ねⅨ～Ⅺ期、年代にして9世紀半ばから10世紀前半が当てられると思われる。

3号住居址からの出土遺物は少ないが、第9図33は床面からの出土である。33は、甲斐型坏とは胎土が異なり、器高は低く、器厚は厚い。特に底部は10㎜と厚い。底部は回転糸切り無調整で、年代的には11世紀後半から12世紀はじめが当てられると思われる。

4号住居址では、第9図35の坏は、口径・底径、底部および体部外面の手持ヘラ削り、内面の渦巻状暗文などの要素からⅨ～Ⅹ期、37の甕は口縁形状からⅩ期以前であると思われる。出土状況を見ると、36が床面に近い位置での出土であるほかは浮いた状態での出土であるが、遺構の時期としては概ねⅨ～Ⅹ期、年代にして9世紀半ばからおわりまでが当てられると思われる。

5号住居址出土の坏第9図39は、口径・底径・深みのある器高、底部および体部外面下半の手持ヘラ削り、内面に暗文が見られないなどの要素からⅪ～Ⅻ期、40の皿は底部に回転糸切り痕を持ち、Ⅻ期に当てられる。また、41は胎土が粗雑であり、Ⅻ期後半以降に当てられる。小型甕の43は厚い口縁であり、Ⅻ期に当てられる。出土状況は、43がカマド周辺出土のほか、39が床面の出土であり、5号住居址の時期はⅫ期、年代にして10世紀代が考えられる。

これらをまとめると、2・4号住居址が最も古く、1号住居址がすぐそれに続き、9世紀後半には3軒の住居が同時に存在していたことになる。10世紀には2号住居址を切る形で5号住居が存在し、最も新しい3号住



第20図　堀立柱建物平面図

居址は、少し間隔をおいて11世紀後半から12世紀はじめにかけて存在していたものと思われる。

（2）土坑

今回の調査では14基の土坑が確認されている。この中には規則的な配置を思わせるものもあり、掘立柱建物址の可能性もあると思われるが、深さや大きさが不揃いであり、柱痕跡も見られないことから断定を避けた。掘立柱建物址とするならば、1間×2間、柱間寸法が南北方向で1.2～1.5m東西方向で1.6～2.0mの建物（第20図）が想定できる。

（3）まとめ

今回の調査では、竪穴住居祉5軒、土坑14基が検出された。狭い調査区域ではあるが、これらの状況を見ると、調査区西側に集中し、東側については遺構が確認されておらず、集落は調査区から西方向に広がっているようである。またこの調査地は、断続的ではあるが9世紀半ばから12世紀はじめにかけて約250年にわたって居住域とされていたことがわかった。しかし、断片的な調査であるため、不明な点は多く、集落の規模はどの程度か、時期的にはどこまで遡るのかといった問題は、今後の調査によって明らかにされることが期待される。

註

(1) 坂本美夫　末木　健　堀内　真　「甲斐地域」『神奈川考古第14号　シンポジウム　奈良・平安時代土器の諸問題―相模国と周辺地域の様相―第II版』1983　神奈川考古同人会

(2) 山下　孝　「坏」『甲斐型土器―その編年と年代―』1992　山梨県考古学協会

(3) 瀬田正明　「皿」『甲斐型土器―その編年と年代―』1992　山梨県考古学協会

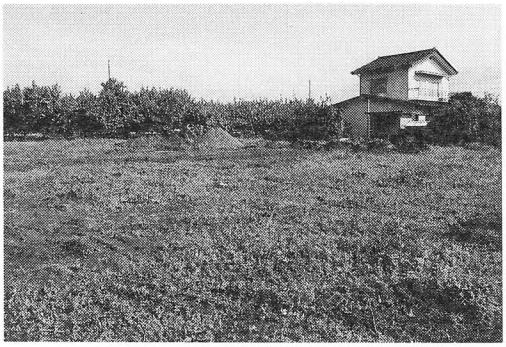
(4) 保坂康夫　「甕（大型）・甕（小型）」『甲斐型土器―その編年と年代―』1992　山梨県考古学協会

(5) 瀬田正明　「甲斐型土器の年代」『甲斐型土器―その編年と年代―』1992　山梨県考古学協会

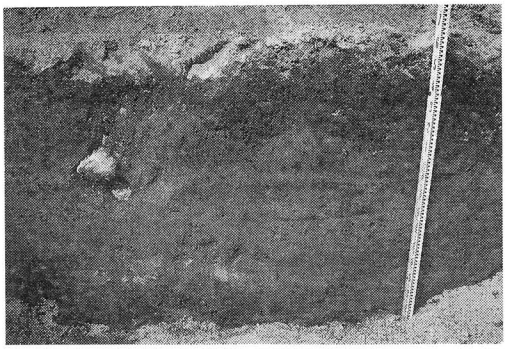
櫛原功一　「第5節　宮ノ前遺跡における奈良・平安時代の土器・陶器」『宮ノ前遺跡』1992　韮崎市遺跡調査会・宮ノ前遺跡発掘調査団・韮崎市・韮崎市教育委員会

参考文献

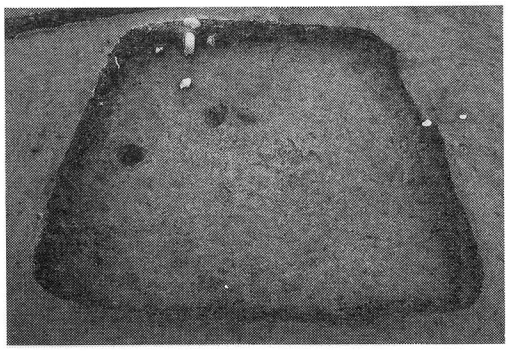
山梨市教育委員会　『日下部』　1987
山梨市教育委員会　『荒神山』　1987
武川村教育委員会他　『宮間田遺跡』　1988
石和町教育委員会他　『松本塚ノ越遺跡』　1990
石和町教育委員会他　『茶かん遺跡』　1991
石和町教育委員会他　『御幸道遺跡』　1992
一宮町教育委員会他　『松原遺跡』　1992
韮崎市教育委員会他　『宮ノ前遺跡』　1992
牧丘町教育委員会　『古宿道上遺跡II』　1994



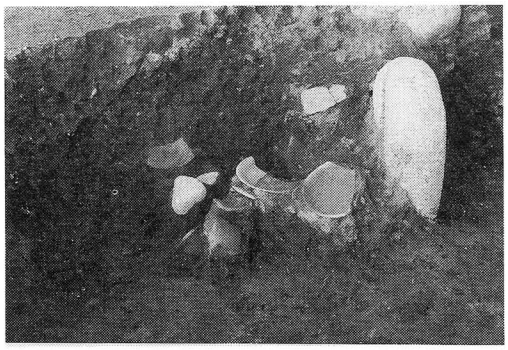
調査前風景



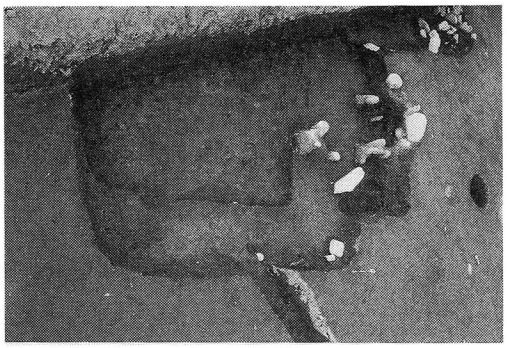
深掘り部セクション



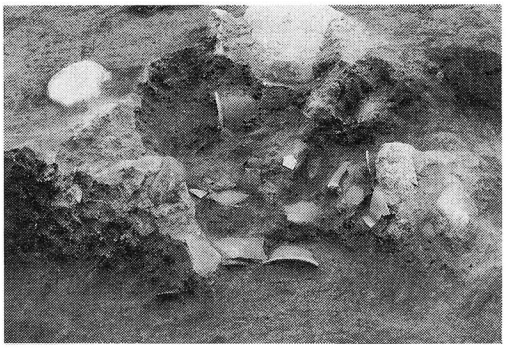
1号住居址



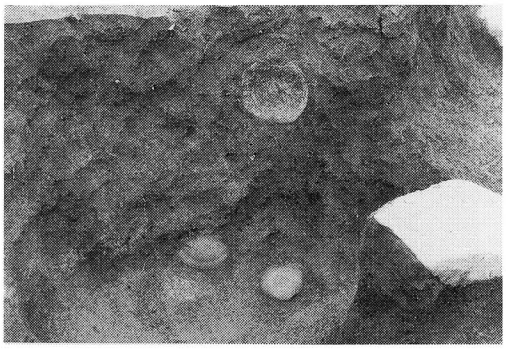
1号住居址遺物出土状況



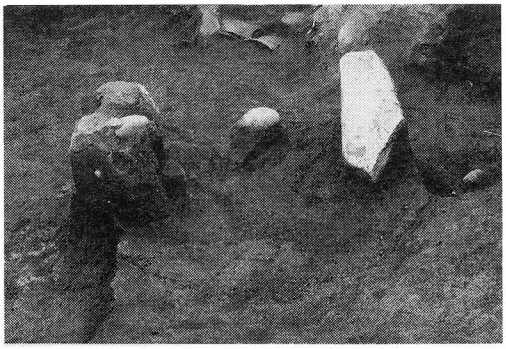
2・3・5号住居址



2号住居址遺物出土状況

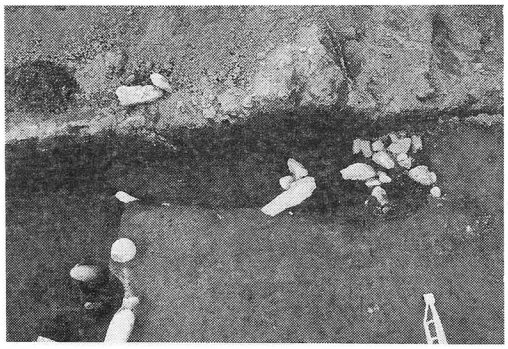


2号住居址遺物出土状況



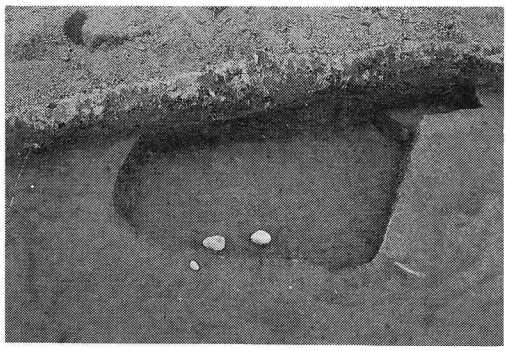
5号住居址カマド付近

図版 1

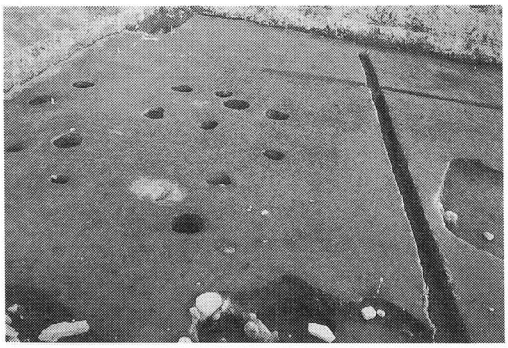


3 号住居址

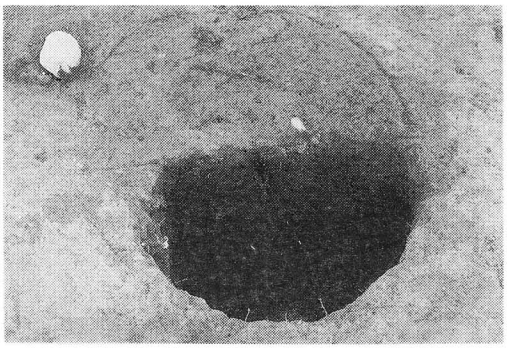
3 号住居址遺物(34)出土状況



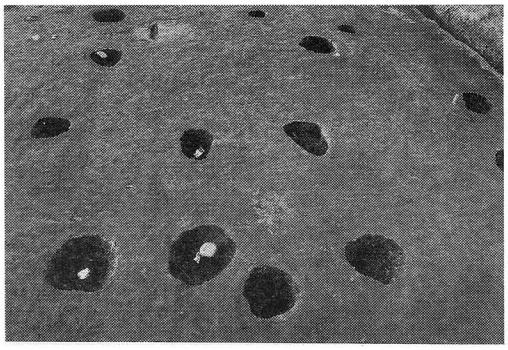
4 号住居址



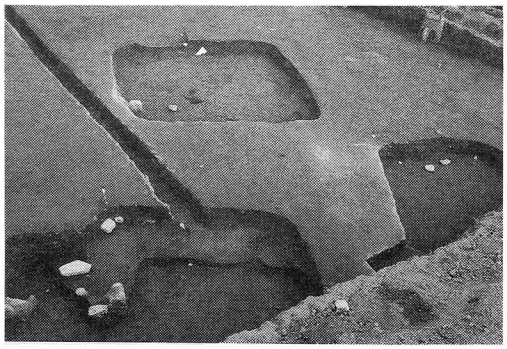
土坑群



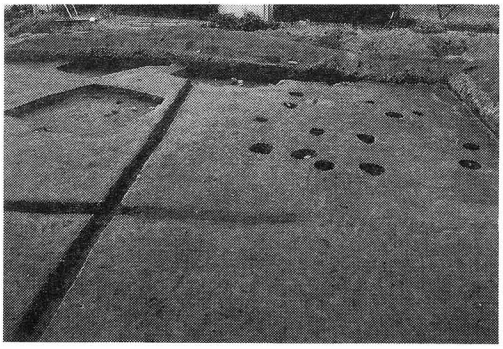
土坑半截状況



掘立柱建物力



調査区近景(西から)



調査区近景(東から)

図版 2

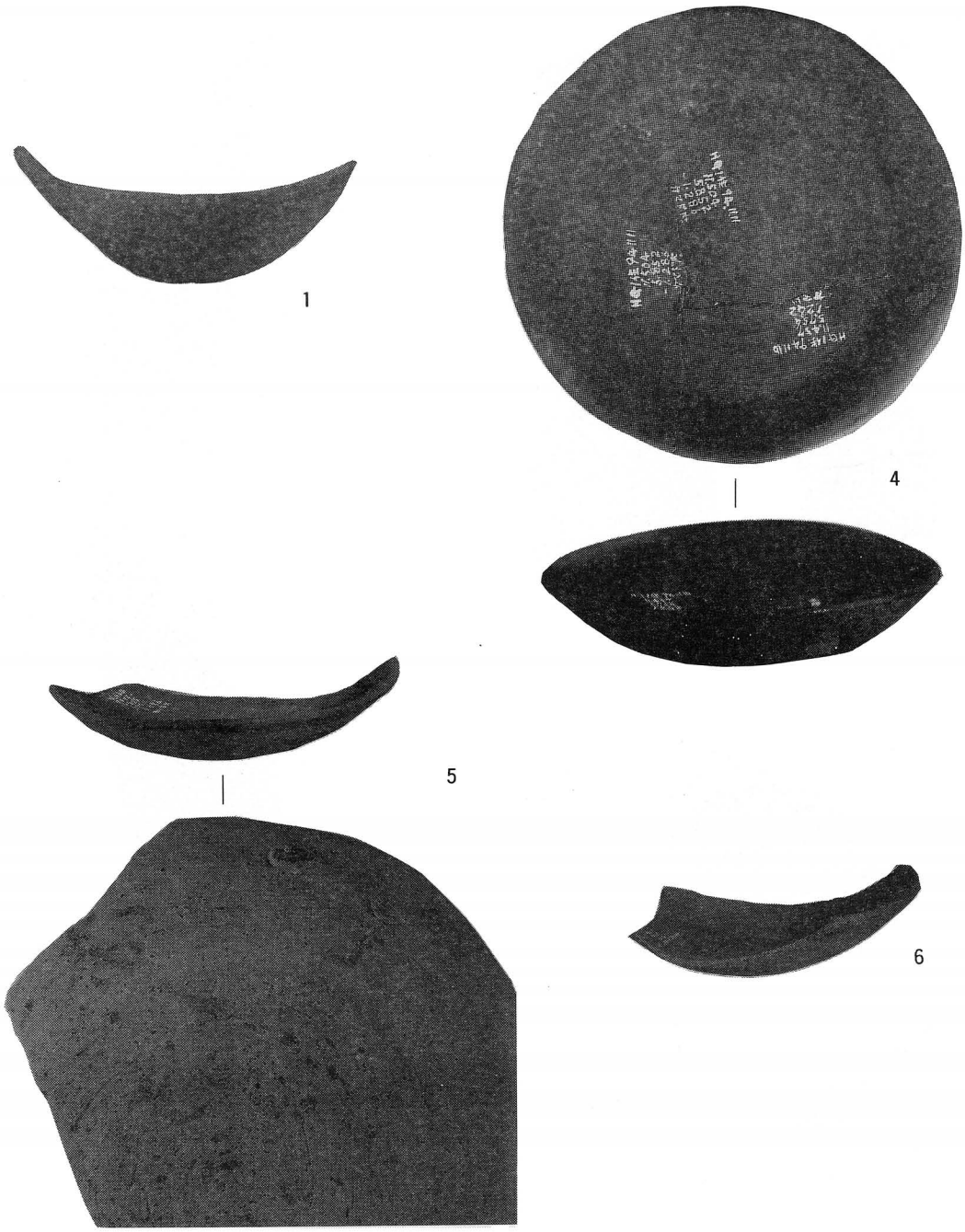


図 版 3

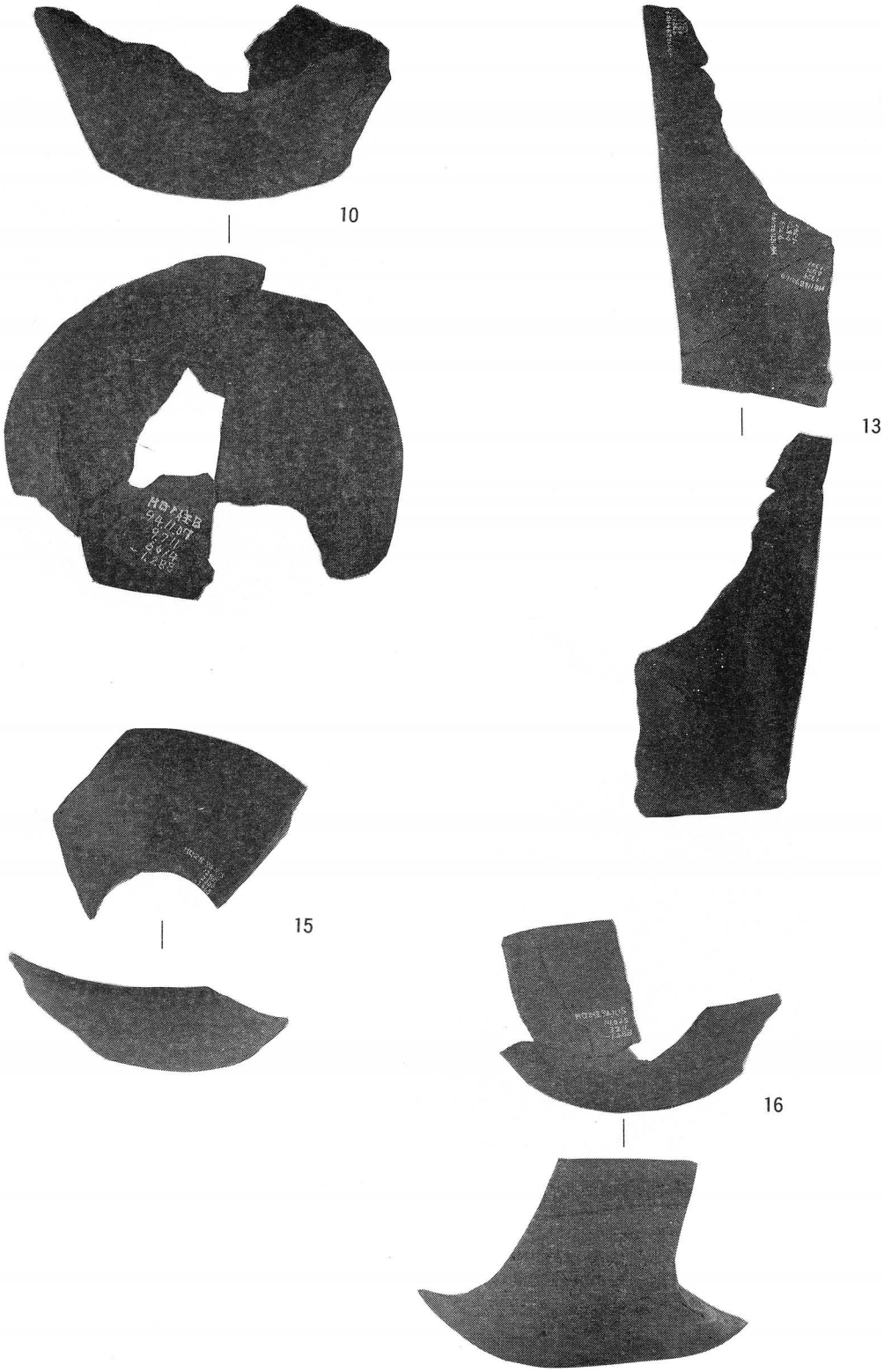
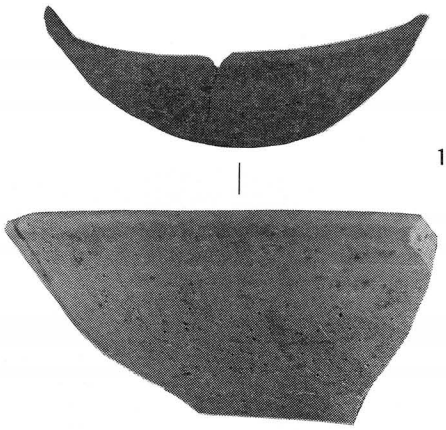
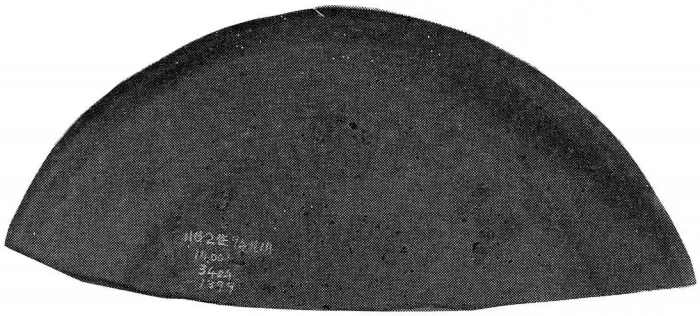
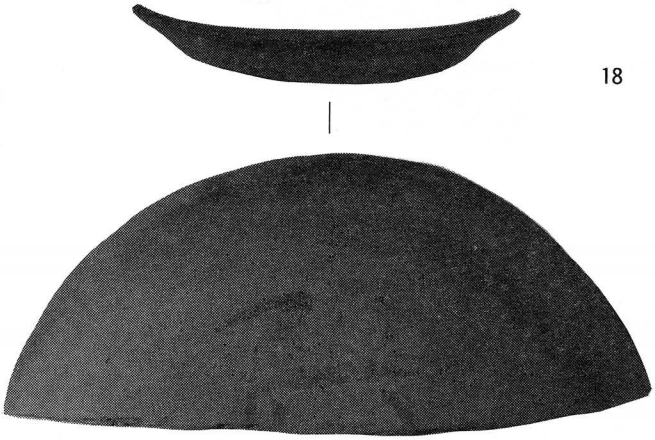


図 版 4



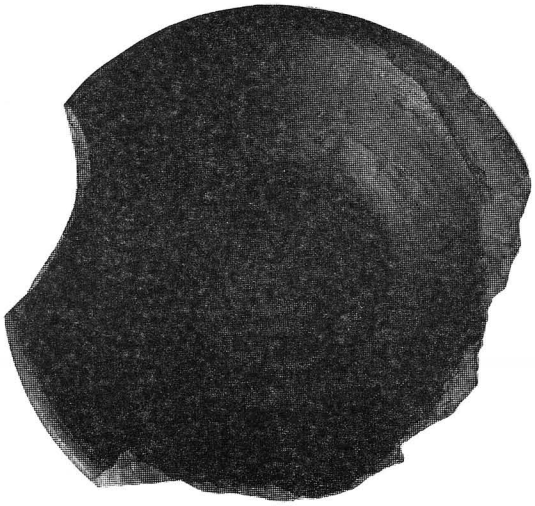
17



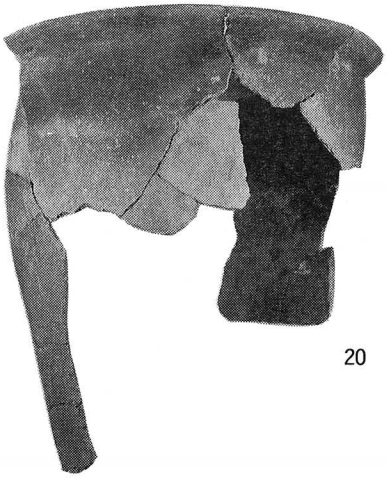


18

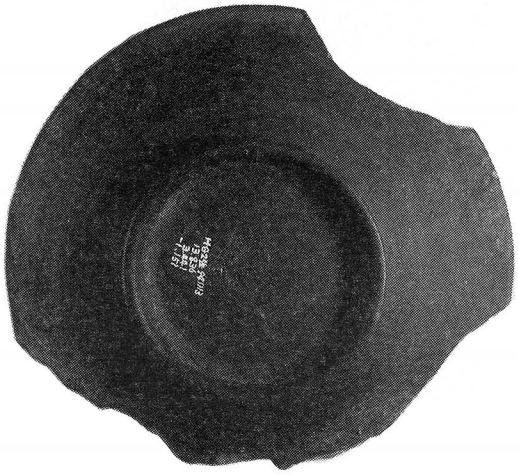
図 版 5



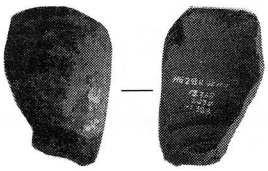
19



20



29

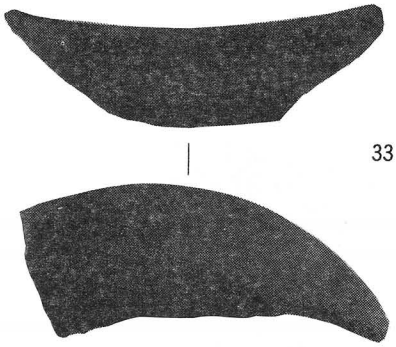


30

31

32

図 版 6

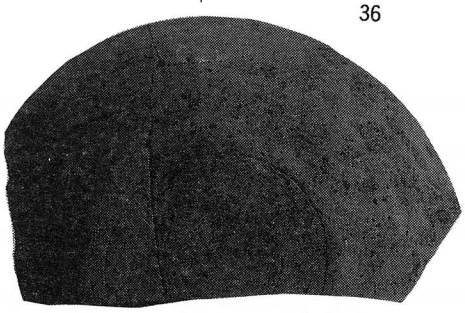


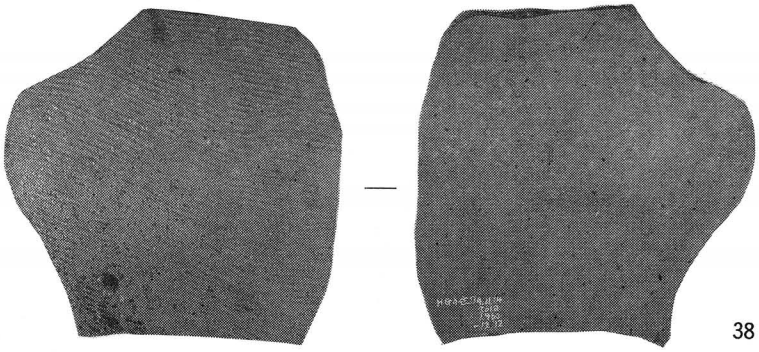
33

34

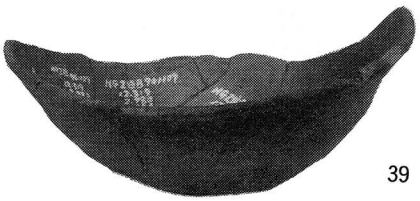
36

35



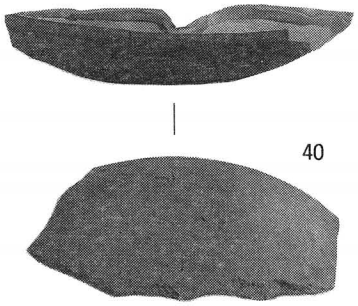


38

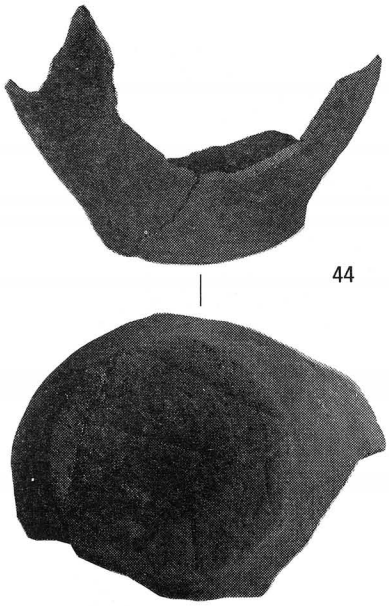


39

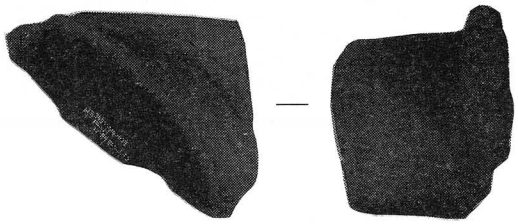
図 版 7



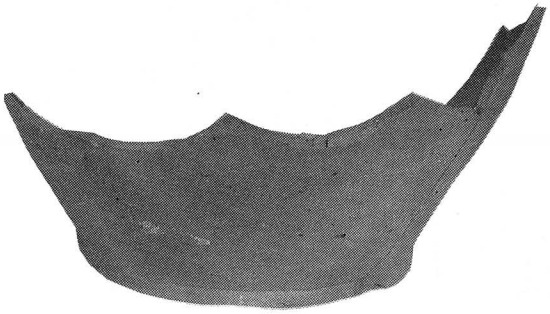
40



44

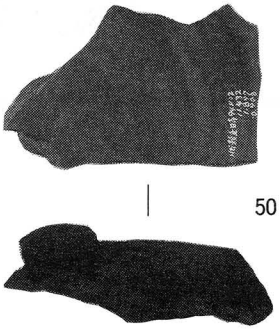


46



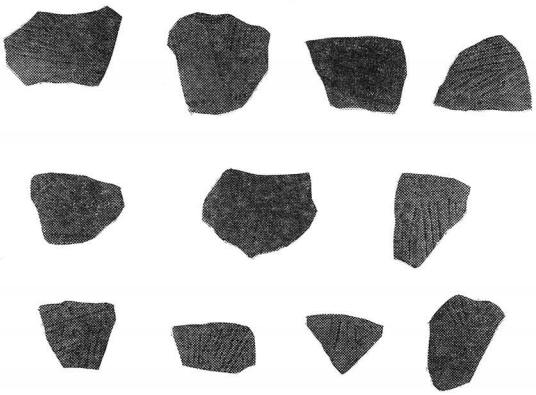
47

48

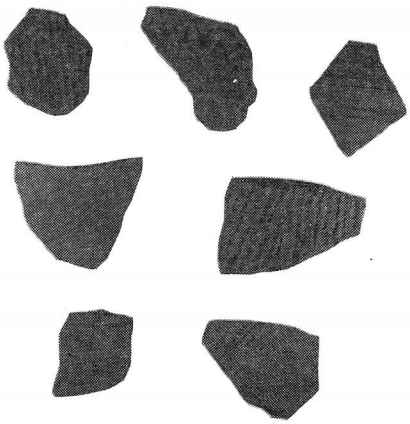


50

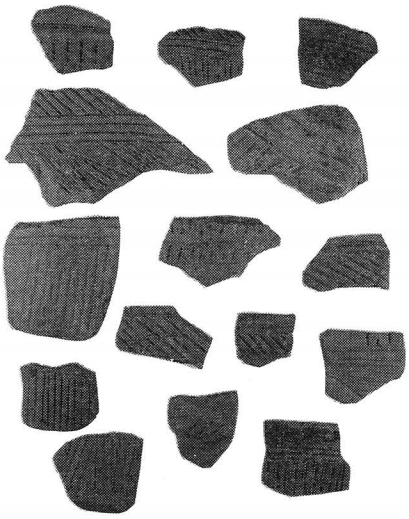
図 版 8



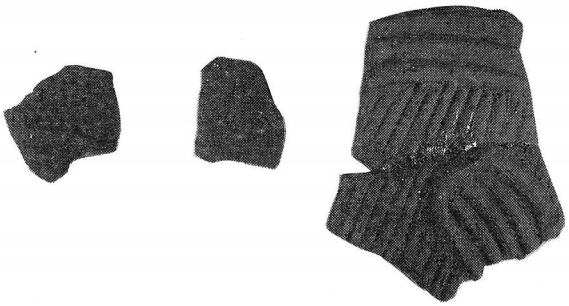
縄文土器①



縄文土器②



縄文土器③



縄文土器④

石器

図 版 9

報告書抄録

ふりがな	ひがしごやしきいせき
書名	東後屋敷遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山梨市文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	三澤　達也
編集機関	山梨市教育委員会
所在地	〒405 山梨県山梨市小原西955　TEL 0553－22－1111
発行年月日	1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひがしごやしきいせき 東後屋敷遺跡	やまなしけんやまなしし 山梨県山梨市 ひがしごやしき 東後屋敷322	19205		33度 41分 2秒	138度 24分 50秒	19941020 ～ 19941115	300	分譲宅地造成に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東後屋敷遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	竪穴住居 5 土　坑14	縄文土器 石器 土師器 須恵器 金属器	平安時代集落

山梨市文化財調査報告書　第４集

東後屋敷遺跡

印刷日　1995年３月31日
発行日　1995年３月31日
発行所　山梨市遺跡調査会
〒405 山梨県山梨市小原西955
TEL 0553(22)1111
印刷所　毎日印刷
〒405 山梨県山梨市上石森123